
ロマンシング獣記

楽都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロマンシング獣記

【Nコード】

N7944H

【作者名】

楽都

【あらすじ】

白呪記の主人公、リオはファインシャートの女神によって息抜きとして違う世界に飛ばされる。本の中に強制的に送り込まれた世界とは、リオが好きな“ロマンシングサガ3”の世界だった！女神による究極の二択でいつも通り猫の姿にされ、二足歩行を可能とし、冒険を楽しんで来いと告げられる。さあ、リオは現実の世界と、守護獣ガウラの居る世界に戻る事が出来るのか！？<不定期更新中

>

プロローグ（前書き）

白呪記の主人公リオが、ロマンスिंगグサガ3を冒険する物語です。白呪記と微妙に繋がっています。本編には直接関わりの無い様になります。この二つの世界観を壊したくない人は見ない方が良いでしょう。

プロローグ

私は寝ていた筈だ。

守護獣ガウラと一緒に、少女趣味のフリルが付いたカーテンが特徴の、お姫様が使うだろう白い巨大な鏡台が設置された、クイーンサイズ程のある大きなベッドで。

昨日一日は忙しく、ファインシャートという異世界から魔族の世界の眠れぬ町不夜城、“デルモント”へ慌ただしく移動していたんだ。

移動した後は、デルモントを統治しているファランティ・・・あれ、名前忘れた。とにかく熊を連想させる巨体の魔王さんにお目通りした後、ガウラと一緒に客間を使わせてもらう事になったんだ。でも、目を覚ませば一面青色の世界。ベッドも無いし、勿論ガウラも居ない・・・

「リオ」

「!!」

陽光が差し込みつつある中、母なる海を思い出させる雰囲気、前に一度会った女の人が後ろから近付いて来た。

「エリ、しゅ・・・?」

自分のド忘れぶりに舌打ちしたい。私にとっては重要な人物の名前を、すぐに忘れてしまうのだから　　って!!

「え、嘘・・・私、猫じゃ無い　　?」

目を見開き、自分の手を凝視して顔を軽くペチペチ叩いてみせる。いや、今まで猫の体だったからそれに慣れてたというか。私の不可思議だという顔を見て、女神さまは麗しく微笑んでお喋りしてくれた。

「久し振り、リオ。元気にしてた？」

「久し振りって言う程じゃ無いでしょっ！あれから一週間も経って無いんじゃない……」

「って、そんな事どうでも良いんだった。挨拶じゃ無くて、この人には聞きたい事があるんだから！」

「あのっ「ねえ、リオ。貴女にお願いしたい事があるんだけど、いい？」」

両手を後ろに回し、急に上目遣いして窺うように強請る女神さま。くそう。金髪な上に美人がそれやると、断れないの知ってて計算してるんじゃないの？ だって、前まで猫にされて日常を謳歌……じゃなくって、強制的に異世界連れてこられた上に、自分の姿を猫に変えられたんじゃない「お願い」なんて聞けそうも無いでしょ。半分はこの人のせいでもあるのに！

眉を顰めて口から唸り声が出る。半目で睨んでいると、女神さまは言いだした。

「リオ、ちょっとコッチ来て」

白く透き通る様な柔らかな腕の中に、突如現れた本。表紙の文字はさっぱり読めない。軽く装飾された柄以外には、特徴も何も見当たらずにどうしたら良いのか分からない。私に気軽に読ませようと、分厚い本を開いて二人で一緒に眺めた。

「・・・」
「この世界もすつごく楽しそう。ねえ、ちょっと息抜きに此処こゝ行ってみない？」

巨大な魚が人を飲み込んで、周りに居る人をその巨体で踏み潰し水圧攻めに。

巨躯な体と槍で人間をぶん回し、頭上から持ち上げた人間を完膚なきまでに叩き落とす。

女の人が操る三頭の竜で、人間を熱・冷・雷のトリプル攻撃で息つく暇なく攻め立て。

死神も真つ青の、良く磨かれている巨大な鎌かまで生者の即死を付け狙う、それを見せられて何処が楽しそうで息抜きになると？！

本の中に居る人物やモンスターは今にも飛び出してくそうな勢いで、臨場感溢れる映像を見ている様な錯覚に陥らせてくれる。ゲームしてる分はそりゃ楽しいだろうが、実際行くとなると別問題ですよ？

「楽しそうだよね？ね？」「ロマンシングサガ3」、リオ好きだもんね！」

ヤカマシイわ。それ以上喋ると、女神さまと云えどほつぺた引つ張るぞ。既にお願いで無ない。単に我儘に聴こえるのは私だけでは無ないはずだ。

「実はあー、リオに喜んで貰おうと思っってえ、この本神様からぶん盗ぬつて来こっちゃった！」

「それで、エリーちゃんは何をしたいのかな？」

女神さまのイメージぶち壊した。何なの、ぶん盗って来たって。長い名前を略してエリーちゃんと言ってやったら、彼女は大きく目を見開いた。

「・・・リオ、思い出したの？」

「えっ、一体何の事？」

「・・・ううん、良いの。コッチの話！・・・それはさて置きリオ、貴女は人間だけと言葉が通じないと、猫の姿だけど人間の言葉が理解出来て、尚且つ喋れる、どっちが良い？」

何勝手に話し進めてんだこの女神さま。しかも究極の二択じゃないか。

「どうして猫の姿ばかりなの！ エリーちゃん、私を何だと思ってるの！」

「だってリオが変身する猫姿が可愛いから、ついそれで設定しちゃうの・・・」

「ついて・・・」

可愛いと言われて嫌な気分にはならないが、エリーちゃんだけは別。甘やかすと更につけ上がせるだけだ。助長するかもしれん！と、今後の事を危惧して彼女に近づき、今までの鬱憤を晴らすように頬に手を伸ばしたその時

「リオ、猫の姿で行ってらっしゃい 因みに二足歩行、出来る様にしたからね！」

「わっ、わわー！！」

凄い吸引力で本に引っ張られる！

せめて一回は女神さまであるエリーちゃんの頬つぺたを強く擦じ
ってやりたかったのに。

「存分に楽しんで来てねっ。感想、待ってるから！」

下半身が本に入ったまま、腕だけで精一杯上半身を支える。これ
って一種のホラー版、“てけてけ”に匹敵するんじゃない……！

「フ、フギヤアアアッ！（エ、エリーちゃん……！）」

前振りも無しに、猫の姿に変えられたもんだから腕で支え切れな
くなった。

本の中に吸い込まれると、その役目を引き受けたかのようにパタリ
ときつく閉じられ、持ち主の腕の中に収まる。

「リオ、昔も貴女は私の事を“エリー”と呼んでくれたのよ？早く
思い出してよ、いつまでこんな気持ち味わわなければならぬの
……」

私の

それだけ眩くと光に包まれ、本と共にその場から姿が消える。

彼女の悲痛な感情を、今は誰も知る事は出来なかった。

> i 1 6 3 4 6 — 2 2 5 4 <

リオのイメージイラストです。

試験的ラクガキ用に載せました。

プロローグ（後書き）

息抜きに書いてみました。

ロマンシング獣記と、白呪記は微妙に繋がってしまいました。本編にはなるべく関わらないようにします。頑張って書いていきますが不定期連載になるかと思います。

001 シノンの森で

女神エリシユマイル、通称エリーちゃんに再び猫にされた私は森の中に居た。

見渡すは一面の森だらけ。大木が視界を遮って、向こう側も何も見えない。

朝なのに木漏れ日は今一つで、太陽もお目見え出来ない。

先程まで雨が降っていたんだろうか、土が湿っぽくて歩きづらいつたらない。

雨と木々と泥の匂いが混ざり、あんまり嗅ぎたい匂いでもない。

・・・エリーちゃん、次会ったら覚えとけよ。

彼女に何かの報復を考えていると、フと温かい腕を思い出す。

ガウラは、彼は、寂しがついていないだろうか？姿を見せない私に嫌気がさして、魔族の世界のデルモントを出ないだろうか？

悲しみが胸一杯に広がる。

彼が居ないと過ごして行けないのは私の方。

優しい心を利用して、守護獣なのを良い事にしがみ付き、ガウラの自由を奪い取る・・・彼の居る世界に戻ったとしても、もし傍に居てくれなかったら。その時私は？

「へへっ、ネガティブまっしぐらだ・・・」

切り株にしゃがみ込み、涙を零す。

どんなに考えても、この状況は覆らない。だったら、エリーちゃ

んの言う“ロマサガ3”の世界を楽しむしか無いじゃないか。

ブルブルツと白い体を震わせて、気合いを入れる。すると、複数の足音が前方向から聞こえて来た。

今の私は猫だから、少しばかり遠くの音も拾い取ることが出来るんだ。

「この森を抜けると、ローヌ侯が居る陣営に辿り着く。陣形はさつきと同じ、前衛に俺、ユリアン、エレン、トーマス、サラが後衛で防御しつつ攻撃。モニカ姫はサブメンバーだ」

「分かった。皆、気を引き締めて行くぞ！」

「分かったよ」

「ああ」

「うん！」

「皆さん、もう一踏ん張りです。頑張りましょう！」

おおつ、もう主要メンバーが来ちゃったじゃないか！！ こうしちゃいられない。是非とも仲間に加えて貰わないと。

座っていた切り株から立ち上がり、男の人三人、女の人三人の計六人の元へと駆け出す。すると色黒の顔が特徴の、アジアンテイストを匂わせる目付きの悪い男の人が私の気配を一番に感じ取り、曲刀を構えて立ち塞がって来た。

「何者だ！」

「えっ、何か居たの？」

「全然気付かなかった・・・」

「俺も、全然気付かなかった」

「えっ、えっ、ええ！！」

彼らから二メートル離れた所から思わず立ち上がり、武器は持っていないと示す為に、白い毛むくじやらの腕の上にあげ、万歳の格好にして立ってみる事にした。警戒を緩める事無く、徐々に近付いて来る彼等に一言。

「は、初めまして。あの、私の言葉が分かりますか？」

初・人間との会話。さあ、ちゃんと通じるのかな？

「猫が……」

「喋った……？」

もう一度、はっきりと喋った方が良いかな？

こういうの、始めが肝心だし。良い印象を彼らに植え付けなくてはっ！

「う、嘘じゃないですよっ！ 猫だけど、喋れます！」

「……」 嘘オオオ！？？

「……」 「……」 「……」

流暢に話す私の言葉に、六人もの二対の瞳が一斉に見開いた瞬間だった。

森の中を徘徊している、地狼やゴブリン、妖精を薙ぎ払いつつ自己紹介をして貰っていた。

「俺はユリアン。ポニーテールの彼女が幼馴染のエレン、その妹が

サラ、眼鏡を掛けたこいつは俺の友達トーマス、そんでこの御方はモニカ姫、こつちの色黒の目付きの悪いおっさんがハリードな！」
「目付きが悪いは余計だ」

「よっ、よろしくお願ひします！ 私の名前はリオって言います」

緑色の髪の毛が特徴の、長剣を手に持つ彼は友好的に喋ってくれ
る。ゲーム中でのユリアンの性格は、正義感に溢れる青年だ。私が
猫でも疑う事無く喋ってくれるから安心する。

「私、猫が喋ってる所初めて見たよ。リオ・・・で良いのかい？
私の事はエレンで良いからね！」

頭を擦ってくれるポニーテールの美人さん、エレン姉さま。

あつ。私、主人公達の中では一番好きで、何回も操作しつつ、常
にメンバー入りを果たしていた彼女。憧れの人に喋りかけて貰える
なんて、リオ感激・・・！！

「お姉ちゃん、リオちゃん泣いてるよ？ どうしたのかな」

栗毛色でパーマ掛かった髪の毛が特徴の、一見頼りなさそうな女
の子サラ。腕っ節が強く、且つ美人のエレン姉さまの妹はあんまり
パツとしないんだよな。けど、この子が一番物語に関わってるのは
知ってるし。

「この森は危険だから、リオは俺達と一緒に来るかい？」

「うん、是非お供させて下さい！！」

眼鏡を掛けた紳士、トーマス。ゲーム中では彼をあんまり操作す
る事は無かったんだよね。特徴と言ったら・・・様々な地域の農業、
商業、食料品と、果てはホテルまで幅広く買収するという重役が、

彼には課せられていた筈だ。私はお金を稼ぐのを苦手としているので、彼を操作したのはたったの一度だけだった。

「こんな時に不謹慎かもしれないけれど、仲間が増えるのは嬉しいわ。一緒に行きましょう」

ここには居ない、ローア又侯国を統治する君主、ミカエルさんの妹モニカ姫。

ゲーム画面では分からなかったけど、ローブから見える顔は少し憔悴して見えるがそんな事でこの人の美しさは揺るがない。・・・ユリアンが付いて行く気持ち分かるかも。

「モニカ姫、あんたがリオを見てやってくれっ！・・・っと、よし。後はあの小道を通り抜けるだけだ」

ユリアン達の先頭に立ち、襲い掛かる地狼を月に模した曲刀で一網打尽に切り捨てるハリード。ユリアンやエレン達が協力して倒す狼達を、彼の放つ斬撃一つで地に果てる。技量も体力も、ここにいるメンバー全員が束になっても彼には敵わないだろう。その証拠に、この世界では“トルネード”と大層な呼び名まである有名人だ。

先頭を歩くハリードの背中を眺めながら一同、ケモノ道に足を踏み入れたその時。自分達に大きな影が出来た。

「な、何だあれ・・・」

「知らないよ。あんなデカイ鳥、見た事も無い」

「アレは・・・ガルウイングだ！来るぞ、皆準備しろっ！！」

私達の居る頭上を、何度も旋回して威嚇して来る怪鳥が、鋭い嘴くちばしと爪で襲い掛かって来た
！！

001 シノンの森で（後書き）

補足 ロアー又候国を候爵として国を治めているモニカの兄ミカエル。

爵位を公から侯爵へと訂正しました。

爵位の意味も知らずに小説書いて、後で慌てるハメに・・・（汗）

じつしゃへ
侯爵

もと五等爵（公・侯・伯・子・男）の第二位。

知識としては何とか名称まで知ってましたが、順位まであるとは知らなかったです。息抜きとして小説書いてた筈なのに、逆に疲れます。

002 リオの初陣

シノンの森をもう少しで抜けそうな所で、巨大な鳥、ガルウイングが襲いかかって来た。紫色の毛羽による突風と、空中に浮かび移動する事により、中々攻撃を当てる事が出来ない。

先頭に立つハリードのお陰で、嘴くちばしと引つ掻き爪による直接攻撃を防いで貰ってはいるが、中々反撃に転じる事が出来ないまま時間だけが過ぎる。

「・・・っサラ、お前の影ぬいで奴の動きを封じる事は出来ないのか?!」

ハリードが攻撃を防ぎつつ、後方支援している仲間問い掛ける。

「無理よ、もう力が残って無い・・・!」

長弓を持ち、牽制する為に打ち込む事しか出来ない彼女の息使いが荒い。

確かロマサガはWP（技ポイント）、JP（術ポイント）というパラメータが存在していたはず。使えないと言う事はWPが尽きたと言う事だ。

「エレン、お前は斧でトマホークが出せるか？」

「やってみるよ!」

エレン姉さまの渾身の力を込めた手斧が、ガルウイング目掛けて投げつけられる。斧によるブーメラン効果で、自らの手に返って来て反応を待つ。羽根に当たったは良いが致命傷にはならず、逆に怒

らせたようだ。

「ギヤアギヤアツ！」

「ぐっ！ エレン、避ける！！」

「なっ・・・？ きゃあっ！」

「エレン！」

「お姉ちゃん！」

ハリードの斬撃を強健な翼で受け流し、狙いをエレン姉さまに定めたガルウイングが攻撃して来た。空高く舞い上がった高度からの体当たりは、人間にはひとたまりも無い　　って！？

「エレン姉さま！」

本当の“死”では無いにしろ、気絶して倒れる姿を見て私の頭は沸騰する。

美人な彼女を

麗しい姉さまを

一番好きなキャラをよくも！

「リオちゃん、駄目よ！」

モニカ姫から離れ、彼らの持ち寄った道具袋の中を素早く漁る。

途中ゴブリンから引ったくった棍棒をしっかりと持ち、私は二本足で地に奮い立つ。

肉球が何だ。猫、舐めんじゃねーぞっ！

決して速いとは言えない速度で、近づく私を目に留めた奴は自慢

の翼で振り払う。

豪速を纏った疾風と振り払いのせいで、体重の軽すぎる私は近くまで行けそうも無い。だったら　　！！

「ハリード、私を背負って近くまで寄れる？」

前衛で攻撃を防いでいた彼にお願いする。近くまで寄って、尚且つ無事に済めるのはこの中では彼しかない！

「出来なくは無いが、お前がその棍棒で打ち込むのか？」

うん！と返事する。女に、猫に二言は無いつ！

ハリードの顔が一瞬呆気にとられて、暫く逡巡した後表情を引き締め直す。私の真剣な顔を見て、どうやら検討してくれると見た。

「何か策でもあるのか。・・・よし、分かった。サラとトーマスはエレンを守りつつ防御、これ以上攻撃を受けさせるな。ユリアンは一人で辛いかもしれんが奴の攻撃を俺達から逸らしてくれ」

「分かった！」

「俺も、出来るだけ援護するよ」

ユリアンとトーマスの心強い返答を貰い、作戦は動く。

ユリアンの巧みな陽動により、今度は奴の懐にまで近付くのが可能となった。今の私は、ハリードの広い背中におぶさっている。

棍棒を手に持つ私は一見間抜けな光景とも取れるが、危険を冒してまで皆が協力してくれるんだ。失敗なんか出来ないし、したくも無い。

「行くぞ、リオ！」

「いつでもオツケ!!」

ハリードと猫による二人の連携攻撃を見よ!

かぎ爪による攻撃をハリードの曲刀で弾き、怪鳥ガルウイングに少しづつ近付いて行く。ユリアンの誘導により、奴の意識が後衛の彼に半分は行っている。

奴の攻撃範囲内に入った私達に気付いた怪鳥は、近付けさせない様にと私達に慌てて攻撃を開始した。奴の会心の一撃くちばしによる嘴攻撃をハリードに防いで貰い、私はチャンスを伺う。

「・・・剣だけが取り柄だと思っな・・・よっ!!」

曲刀で防ぎつつ睨みあいが続く中、彼が右足で怪鳥の腹を蹴り上げる。突然の痛みと驚きで、鳴き声を上げる怪鳥に隙が出来た。

「ギャアアアツ!!?」

「今だ、行け! リオ !!!」

敵は怪鳥、ガルウイング!

両手から外れない様に、しっかりと両の手で握りしめた棍棒を奴の頭にお見舞いする為に。

ハリードの頭に、泥が付いた毛むくじゃらの白い足で踏ん付けて、思い切り跳び上がった。

喰らえ、リオ流 “脳天割り”!

ポコオオオン!!

小気味いい音が辺りに響き渡る。

・・・なんて間抜けな音なんだろう。猫の腕力ではこれが精一杯なのか。

「ギャ、ギャアアア???」

振り下ろした“脳天割り”を喰らったガルウイングは、目を回して地に倒れ込む。

確かこの殴打は、眠りを誘発したはず。案の定、一時的に奴は眠りについた。

「皆、今の内に宜しく!」

「良くやった、リオ!」

ハリードとユリアンによる連続攻撃を叩き込み、怪鳥は遂に地に伏せる。

戦いにより騒がしかった深い木々に覆われた森は、いつもの静寂さが戻った様だ。

「はあ、助かったあ。この森から出れないかと思ったよ」

「やれやれだな。しかしシノンの森にあんな鳥は今まで見なかったんだが」

博識のトーマスが頭を捻っている。

眼鏡をクイツと押し上げて今までの記憶を掘り起こしているが、答えがどうしても出そうにないみたいだ。この時点で少しばかり知識を持っている人は、ここで答えを出すつもりは無いらしい。

勿論私も答えを知っているが、ここで言っただけで疑われても困る。

エレン姉さまの回復してから私達七人は、ミカエルさんの居るロアー又平原へと歩き出した。

リオの習得技 脳天割り

眠りの耐性の無い敵に当てると高確率で眠らせる事が出来る。力の強い敵、又はジェル系モンスターには棍棒による攻撃が効かない為、使い所を選ぶ。

003 ミカエル陣営

ガルウイング
怪鳥を撃退した後、気絶して回復したエレン姉さまと私達七人は、鬱蒼と茂るシノンの森をやつとの事で抜ける事が出来た。歩き続けると川に出くわし、皆で軽く手に付いた泥を落としていたら、夕刻が迫って来たようだ。

広大な平原を歩く地平線に、オレンジ色の夕陽が沈み込む

山や緑の草原を、温かい色合いに染め上げる夕焼けが恋しくて、目いっぱい瞳に写そうとして身動きする事を止めた。当たり前前の自然の摂理に今更ながら感動したのは、元居た世界と、ガウラの居るフラインジャーの世界を思い出したからだろうか？

「夕焼け・・・綺麗だね」

“ホームシック”という言葉を出して、一匹で勝手に自己完結させる。この言葉を使うには、まだ早すぎるから。

「？ ああ、綺麗だが・・・どうした、夕焼けは何処でもあるだろう？」

「うん・・・まあ、そうなんだけど」

寂しさが心を占める反面、これって一種の役得じゃ無いだろうかとも思う。まさかロマサガ3で夕陽が拝めるとは思わなかった・・・ゲーム画面上では、特定のイベント以外は闇夜やオーロラは見れない、奇想天外なRPGだったからだ。

先程の戦闘で、最初よりかは幾分話しやすくなったハリードが私の隣に立つ。二人の連携攻撃で、彼の頭を踏ん付けたから泥が付いたままだ。私の体も手足以外は泥だらけだし、まあ箔が付くと言う事で良しとする。

「トオツ！」

「こらっ、お前……！ 肩と背中に爪が食い込んでるぞ。ユリアン、どうにかしろっ」

「良いんじゃないか？ ブフッ……サマ……ブググッ……にはなってる、よ？」

「ハリード、あんた面白いよっ！ 良いねえ、保父さんみたい……アハハハツ……！」

「可愛いねえ。お姉ちゃん、私もリオちゃん欲しいよお……」

「私も、欲しくなつて来ました……リオちゃん、私の所にも来て欲しいです」

「サラ、モニカ姫。リオは物じゃ無いんだからよしなさい」

「……お前ら、俺はどうでも良いのか」

手軽な風呂敷で私の背中に棍棒を固定して貰い、力無く抵抗を諦めたハリードの背中によじ登ると、「チャンス」と一声出す。乳母車があれば、気分は子連れ狼の大五郎。発した言葉の意味を伝え、皆が大爆笑。腹を抱えて皆が笑い出した。

素晴らしく勇ましい私の勇士を、彼ら六人の目に焼き付ける事に成功し、寂しさを紛らわせた。

完全に陽が沈む前に私を含めた七人は、やっとの事でミカエルさんの居る野営まで辿り着く。

竹に似た素材の木を使った、即席の囲い壁で天幕の周りを守る様にと打ち据えられてる。

暗くなる前に薪を火にくべて準備に急ぐ者、飯盒はんごうで白飯を炊く者など、複数の天幕が張られた外側で兵士達が忙しそうに動き回っていた。

入口の見張りをしている者がこちらに気づき、警戒心を強くさせる。目付きを鋭くさせた兵士が、腰に差した剣の柄を握り問い質して来た。

「何だ、お前達は。ここが何処だか分かっているのか！」

「ええ、分かっています。魔物の討伐と称して、ミカエルお兄様が此処に居ると言う事も・・・」

毅然とした態度で、頭に被せた部分のロープを捲るモニカ姫。

見事なブロンドの髪を靡かせ、凜とした眼差しと、薔薇色の頬に桃色の唇は、一度見れば脳裏から薄れる事は無い程の美貌の持ち主へと変貌する。

「モニカ姫！」

「これはとんだ御無礼を、お許しください！！！」

その容姿に見覚えがある二人の兵士が、慌てふためき頭を低くして道を開ける。

ミカエルさんの居場所を聞いて、私達は奥へと進みだす。

複数似たような天幕を通り過ぎると、一際豪華な刺繍が施された紫色の天幕へと辿り着いた。

「お兄様！！！」

「モニカ、お前が如何してここに？」

ロアー又侯国を統治する若き侯爵、ミカエル。肩に掛かる長さの金髪を自然に下ろし、光沢の良い、それでいて頑強な鎧を纏う容姿からは力強さを感じる。洗練された立ち振る舞いは育ちの良さを思い起こさせ、滲み出る美しさは、決してモニカ姫に引けを取らない。意志の強そうな眼差しは、多くの民衆を統治するに相応しい王者そのものだ。

自らの兄の姿を確認したモニカ姫は、走り寄り言い出す。

「お兄様、ゴドウィン男爵が反乱を企てた様です。お兄様の遠征時を狙い、宮殿内に攻め入って来ました！」

「何だと？ そうか、お前はそれを知らせに来てくれたのだな……ところで後ろの者達は？」

後ろに佇む七人の姿を留めると、今まで護衛をして此処まで連れて来てくれた事を告げるモニカ姫。するとミカエルさんは暫く考えた後、私達に提案してきた。

「お前達には悪いが、もう一仕事して貰おう。北方に位置する、レオニード伯爵の居城までモニカを護衛して貰いたい」

「レオニード……！ あの吸血鬼の住む城にですか！？」
「ユリアンがいち早く反応する。」

「下手な人間よりは信頼できる。しかし、吸血鬼にされるのも困るのな。どうだ、やってくれるか？」

「報酬が貰えれば、俺は良いぜ」

皆の色良い返事が聴こえる中、ハリードのがめつい声が響く。

この件が終われば貰えるというミカエルさんからの確証を得て、

ここで一夜を明かす事に。

「ウマ ツ！」

「お前、猫なのに人間と同じ物食べて平気なのか？」

「私を舐めんなよっ！ 猫だけ何でも食べれるよっ」

星が綺麗な夜空の下、私達七人は兵士さん達が作った白飯を頂いた。おかずとして食用の肉や魚も出されたけど、苦労して倒した怪鳥ガルウイングの腿と背中部分をハリードが出して来たので皆で焼いて食べる事に。

羽を箸取り、焼きやすいように木で串刺しにして火で炙る。

ホントは丸焼きも考えていたらしいが、巨大すぎて持ち運ぶのが無理らしいとのこと。さすが主銭奴しゅせんどの！タダで使えるモノは何でも使っつか。

「私が食べてたご飯って刺身か、ミルクか汁物かけたネコまんまばかりなんだよ！ たまには違うのだって食べたい」

二足歩行が可能となったのだ。体力も増えていつもの倍は使ったんだろう。だったら食欲も半端無い。ミルクや魚だけじゃ物足りないのも頷ける。その変わり、体格が小さいので食べる量は皆よりも少ないけどね！

「猫が喋るのも初めて見たが、私達と同じ物を違和感無く食べる猫を見たのも初めてだ」

天幕の外でシートを敷いて食事をしていたら、モニカ姫のお兄さ

ん、ミカエルさんがやって来た。私の横に腰を下ろして胡坐あぐらを掻いている。

ガルウイング
怪鳥の肉を手に持ち、美味しく食べてる私を見て頭を撫でてくれた。

「リオと言ったな。何処から来たのか聞いても良いか」

「それは、その・・・」

ゴニヨゴニヨと言葉を濁す。多分言っても理解出来ないんじゃないかな・・・

こことは違う世界から、女神エリーちゃんに強制的に連れて来られたなんて。しかもファインシャートやデルモントまではしごしてるし。

「リオはシノンの森よりも遠く離れた所から来たと言っていました。故郷から離れて寂しい気持ちもあると思うんです。ミカエル様、話せる時が来るまで許してやって貰えませんか」

紳士トーマスがフォローしてくれる。もっと言ってやってちょうだいッ！

「そうです、お兄様。リオちゃんに疑惑の目を向けしないで下さい。彼女に良い印象持つてもらって、王宮に連れて帰ろうと画策してますのに！」

「え、そうだったの、モニカ姫？」

「えええええ！！ リオちゃんは私が連れてくんだもん！ モニカ姫、ずるいよっ」

・・・え、私の知らない所で何かを企んでる人達がいるよ。紳士トーマスと、お人よしユリアンが普通の発言で済んでるのに、モニカ姫とサラちゃんが睨み合い、プチバトルに突入しそうだ。

「そうだねえ。リオが居れば毎日が楽しそうだし・・・」
「!!!」

麗しのエレン姉さまの発言を聴き、彼女の元へと擦り寄ろうとした。

エレン姉様の隣に居た妹サラが、両手を広げて待つてましたと言わんばかりに待機している。すると突然首根っこを掴まれて、誰かの腕の中へ落ち着いた。

「こいつは俺のパートナーだ。勝手に連れてくな」

「ハッ、ハリード!」

なあ、リオー?と体中を撫でくり回される。その行動に皆が驚いていると、何故か酒臭い。

酔っ払うほど酒飲んでる!!

「ハリード、お酒ください・・・」

「白い大福・・・ムニヤ、お宝お宝・・・」

抱き込んだまま寝込みやがった!!

残された皆は助けにくれそうも無い。頭やら耳やらに、たまに嘔んで来て痛たたた・・・っ!

その夜、私はハリードに一晚中抱き枕として扱われたのだった。

003 ミカエル陣営（後書き）

八人のキャラクターの簡単な名前と説明

リオ・・・白い猫。白呪記の主人公で元人間。ここでも主人公として活躍する。ロマサガ3ではエレンが一番好き。食による貪欲さが目覚ましい。棍棒を装備。

ハリード・・・“トルネード”の異名を持つ流浪の剣士。色黒の顔と、黒い髪を一つに纏めアジアン風味の服装を着こむ。曲刀を装備。金が第一の主銭奴^{しゅせんぬ}。

ユリアン・・・シノンの開拓民。正義感の強い若者。考えるより先に体が動くらしい。緑の髪が特徴。長剣を装備。ハリード以外のメンバーとは幼馴染。

トーマス・・・シノンの開拓民。長い茶色い髪を後ろに括り、眼鏡を付ける。博識に富み、何でも器用にこなす。家が金持ち。以外に紳士。槍と弓を装備。

エレン・・・シノンの開拓民。村の腕相撲大会で優勝の経歴を持つ。面倒見の良い姉御タイプ。ポニーテールが特徴の美人。リオの憧れの人でもある。装備は斧。体術も得意。

サラ・・・エレンの妹。栗毛色の髪で、後ろに括った部分だけがパームがかかっている。消極的な性格だが、リオに対する執着は物凄い可愛い物好き。あまりパツとしない性格だが、物語に一番関わってくる人物でもある。装備は弓。

モニカ・・・ロアー又侯国の統治者、ミカエルを兄に持つ姫。大人しい性格でも行動力があるので、剣術や馬術を得意とする。周囲の人間を虜にするだけの容姿を併せ持つ。サラに対抗してリオを奪い合う。装備は小剣。

ミカエル・・・ロアー又侯国を統治する若き侯爵。領民にも慕われ、王者に相応しいステータスを持つ。産業、社会、軍事を発展させるという気概を持つ。小剣を装備。

ここで言う「チャン」の意味・・・

リオは“お父ちゃん”という意味で、メンバーに言います。その方がしっくりくるかなと。深い意味はありません。

というか八人で、メンバー多すぎで読みにくいし書きにくい。読んでくれる人、どうも有難うございます。(笑)後、ロマサガ3の内容について、他の攻略サイトを参考にして物語を作りますが、おかしな所があってもスルーして下さい。でも、指摘は大歓迎。

004 北方の町・ポドルイ

複数の兵士の居る天幕の中で、ハリードの抱き枕にされてから一夜が明ける。

地平線から朝日が昇り、霧が立ち込め、清々しい朝の空気がロア―又平原に広がる。

マイナスイオンが五臓六腑にしみわたり、彼ら八人の今日も素敵な一日が始まった。

ギユムウツ！

「痛ええっ！！」

「おはようっ、ハリードのおっさん！　いつまで寝てんの。早く起きて起きてっ」

腕っ節の強いエレン姉さまに遠慮無く頬を抓られ、跳び起きたハリード。その顔はまだ眠気まなこだ。

「お、おう、・・・ツチツ！　酒を飲み過ぎたか。・・・ん、何だこの白くて丸いの？」

私の顔を見てもまだ白い大福に見えるらしい。寝惚けながら、両手で体中をモギユモギユされる。

乙女を抱き枕にし、噛み跡まで付けて、拳句の果てに体を餅の様に伸ばして引っ張るとはっ！！　昨日の事も覚えていないらしく、腹が立って必殺猫パンチをお見舞いしてやった。

「・・・」

「では、モニカをよろしく頼む」

「お任せ下さい、絶対モニカ様を危険な目には合わせません！」

「ミカエル様もご健勝であられますように」

モニカ姫改め、モニカ様と敬称を変える事にしたユリアンとトーマス。

やはり旅をするのに“姫”では、危険が付き纏うらしい。

簡素な革の鎧、長剣、少量の傷薬を提供して貰い、私達ハリードを除いた六人は北方に位置するレオニードさんの居る場所まで行く事になった。

「俺が居なくてもやれるさ。皆、頑張つて来い」

顔に斜めの引つ掻き傷を付けたハリードが、皆を励まして送り出す。

ミカエルさんはその顔を見て眉間に皺を寄せていたが、深く追求する事を止めたらしい。既に他の兵士に軍議について命令していた。

この後、この平原でゴブリンの軍団を迎え撃つ。

“トルネード”の異名を持つハリードが居れば、この戦いに終止符が打てる。長期戦に持ち込むつもりは無いらしく、ゴ布林達を叩きのめした後ハリードを連れてロアーヌの宮殿に戻り、ゴドウィン男爵を討つと意気込んでいた。

ミカエルさんが治めるロアーヌへと馬で戻り、港町ミュルスへと一同赴く。そこから各都市を結ぶ事でも有名な、世界最大の都市で

ある“ピドナ”に向かう。そこから更に船に乗って色々な町を経由しつつ、やっとの事でレオニードさんの居るポドールイに辿り着いた。

「うぷッ、長い船旅だったね・・・」

海自体は嫌いじゃ無い。

人間だった頃は船酔いもしなかった。けど猫の状態だと三半規管が狂うのか、平衡感覚が鈍るのか。今度、女神エリーちゃんに逢ったら治してもらわないと！

「ホントお兄様だったら、遠く離れた北方の地方に私を預けるだなんて、離れ過ぎた所に決めなくても良かったのに・・・」

「しょうがないよ、モニカちゃん。レオニードさんなら、何か遭った時でも対処できるとミカエルさんも言ってたし・・・うぷッ」

モニカちゃんと呼んだら喜んで抱き上げてくれた。

エレン姉さまの妹サラも、呼んで欲しそうにしていたのでちゃん付けしたら狂喜乱舞していた。彼女達はこんな性格の子だったかな？吐き気を抑える私は、モニカちゃんの膝の上で丸くなって眠りに入る。

レオニード伯爵が居る北方の町、ポドールイに着くと其処は一面の銀世界。

シンシンと降る雪は、建物や木に止め処なく降り積もる。

建物の窓から覗く温かい光は、人の所在を明らかにし、家族の元へと帰りたい気分を彷彿とさせる。

あまり広くない町の中を、六人で歩き続けると一つの酒場^{パブ}を見た。

酒場^{パブ}はお酒も飲めるし、マスターが作る簡単な料理も出してくれる。

その地方特有の情報を提供して、仲間との別れを斡旋してくれたりもする。ロマサガ3は仲間に出来るキャラが二十人以上はいるから、メンバーを決める上でとても欠かせないお得な場所だ。

「ちょっと中に入って、レオニードさんについて聞いてみようよっ
「んん・・・そうだな、体を温めるのも良いし、情報がてら聞き込みでもするか」

何故か六人のリーダーになったユリアンに、私は勧めてみた。

温かい部屋で丸くなりたいし、窓から見える雪を堪能してみたいのもある。皆の意見を聴き了承を得た所で、サラちゃんに抱っこされつつ一同は酒場^{パブ}に入った。

「いらっしやい」

エプロンを着けた中年のおじさんが、カウンターの前に立って席を促す。

「こんにちは、マスター。何かレオニード伯爵の情報は無い？」

さほど広くも無い空間を見渡して、カウンターや空いてるテーブルの席に着く私達。

ユリアンとトーマスがカウンターで、四人掛けのテーブルにエレイン姉さま、サラちゃん、モニカちゃん、そして猫の私が座る。

「町の若くて美しい娘が、レオニード様の城にそろそろ呼ばれるらしいよ」

「？ 呼ばれてどうするんだい」

エレン姉様が温かいジンジャーエールを人数分頼む。しょうがのエキスで風味を付けたアルコール無しの飲料水で、皆の体を芯から温め体を解していた。

「吸血鬼でもあるレオニード様に呼ばれた者は、自らの血を飲んでもらい、永遠の美を約束されると言われてるよ。だから町の娘達は、こぞって美を追求したがるんだ」

「・・・吸われる本人も吸血鬼になるかもしれないだろうか？ この町の娘達は凄いな」

美を追求する町の娘達とレオニード伯爵の関わりを聞いて、トーマスはメガネを押し上げて感心していた。

「永遠の美なんて、どんな価値があるのかな・・・」

「サラちゃん・・・？」

座っていた椅子から抱き上げられ、彼女の膝の上で丸くなる。

窓から振りしきる雪を見つめ、ポツリと呟くサラちゃんの言葉は猫の私にしか聴き取れる事が出来なかった。

酒場^{パブ}でレオニードさんの情報をそこそこ聞いて、六人は居城へと向かう。

体も温まった事だし、坂を登って町の北方面への出入りに差し掛かる。そこから見える風景に、一同絶句した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雪の道の勾配が複数ある地形、つまり細く狭い坂と道が居城へと

導くように作られてあつた。一つや二つじゃ無い上に、命綱も無く、しかも魔物も彷徨っている。

地を這う犬狼や爬虫類を上手く撒いても、空を飛ぶ妖精ヒクシーや飛竜ワイバーンが寒空を旋回している。

雪の積もつた狭い坂で襲撃されたら、ひとたまりもないだろう。

通常の間人ではおいそれと居城には近付けない設計に、自分達の意識が遠のいた。

「・・・お兄様の考えた事が少しわかりましたわ」

「良かったですね、モニカ様」

「大丈夫ですよ！坂の近くに居る魔物から倒していきましょう」

「これは前途多難だね・・・」

「全くだ。皆、死ぬ気で此処を越えなきゃな」

「この坂道を登り切る頃にはみんな強くなってるよ。頑張ろうねっ！」

サラちゃんとユリアン、そして私も最後に励ます。エレン姉さまは口を引き攣らせて、トーマスはメガネを白く曇らせた。

私が元居た現実世界でゲームしてた時は、よくポドールイで仲間を鍛えていたんだ。体力を回復させやすい宿屋が近いから、ここなら安心して皆と一緒に戦える。

目指すはレオニードさんの居城。

それぞれ武器を手に持ち、雪を踏みしめ歩みだした。

004 北方の町・ポドールイ（後書き）

酒場にルビふってパブとしましたが、005以降は“パブ”とします。

005 レオニード城

戦闘に長けたハリードがパーティメンバーから外れ、私を入れた六人はポドールイのレオニードさんを訪れる為に、途中で魔物と遭遇しながら丘の上の居城を目指す。

ロマサガの戦闘では五人が主流となり、もう一人のメンバーは補助で、非戦闘員となる。比較的体力の高いユリアンとエレン姉さまが前に出て、真ん中がトーマスで前衛が三人、サラちゃんと猫の私が後衛。お姫様のモニカちゃんには補助メンバーになって貰った。

「脳天割り、行きますっ！」

パコオオオン！

ゴブリン愛用の棍棒で、閃いた技を駆使しまくる。

昆虫やゴブリンを一発で仕留める事が出来なくても、この技を喰らった者は眠りに落ちる。その隙に皆でタコ殴りして貰うナイスな戦術、名付けて“ナイトメア殺法”は、比較的強い敵にも効果があるから、多分中盤までなら使えるだろう。

「やった　これで私も、もう立派なロマサガメンバーの仲間入りだっー！」

少しばかり嬉しくなり、調子に乗って棍棒を手に持ちグルグル振り回す。

自らの白い頭の毛を少し逆立て、気分はFFの某チヨコボ頭、クウド・スライー！！

肉球から棍棒を取り落とすへまもしくなっただし、ロマサガ3を

冒険する為に、今の内から鍛えて準備は万端、勿論素振りも欠かさない。目指せ、千本ノック！ フンフンフンッ！

「？ リオ、何言ってるんだ。ろまさかメンバーって何だよ？」

「なっ、何でもない・・・あつ、ユリアン後ろ！！」

「えっ？」

問い掛けるユリアンの背後から、不意打ちに地狼が襲い掛かる。

剥き出しの鋭い牙がユリアンの左腕に噛み付く寸前、凄まじい蹴りが地狼の横腹に炸裂した。喰らった衝撃に耐えきれず、雪原に転がりのた打ち回って、最後には息絶える。

「油断大敵だよっ。この辺に居る魔物をまだ全部仕留めてないんだから、気を抜かない！」

助けてくれたのは、回し蹴りしたエレン姉さまだった。彼女は斧を使った攻撃も得意だが、体術も出来る。素早さを生かした接近戦を得意とする、憧れのお姉さまだ。

「ああ、悪かった。助かったよ、エレン・・・」

「さすがエレン姉さま、素敵い！！」

憧れの人にダッシュで抱き付こうとした時、皆の荒い息遣いが聴こえて来た。

休憩無しで戦ってたから、体力の無いサラちゃんが地面に倒れそうだ。慌てて彼女の足を猫の体でしがみ付き、力を込めて踏ん張りながら尋ねてみる。

「サラちゃん、大丈夫？ 体が辛いなら町へ戻ろう？」

「ありがとうリオちゃん、私は大丈夫だよ。もう少しでお城に着く

し、このまま行こう」

強がりで大丈夫だと告げるサラちゃん。

その反応を見て、不服ととったエレン姉さまが突っ掛かり、両肩を掴んで強い口調で促した。

「サラッ、あなたは無理しちゃ駄目っていつも言ってるじゃないっ！ あんただけでも町へ「イヤだ!!」・・・!!」

「ふげっ」

「リオちゃん！」

エレン姉さまの両腕を振り払うように強く弾く。

その反動で私の体は降り積もった雪の中へと引っくり返り、頭から突っ込んだ体をモニカちゃんに助け出して貰った。暫しの沈黙が続く、サラちゃんの瞳が揺らぐ。

「・・・私だって、もう子供じゃない」

エレン姉さまに言い放つサラちゃんに、皆が驚いた。荒い息遣いでも、見上げて睨み付けるその視線の先は丘の上の居城にある。

茶色と緑が混ざった様な瞳に力が籠もるその力強さは、この地で生きてる実感をしつかりと私に感じさせてくれた。エレン姉さまの言葉を遮り、真っ向から挑む少女は前へ進もうとしている。

(トクッ)

それは、自らの宿命に抗うという覚悟から来るもの？

(トクン・・・)

私はこの世界を、ゲームの世界の出来事だと認識してるのに？

「サラツ・・・！」

「まあまあ、エレン。そう目くじら立てるなよ。此処まで来て帰れなんて、サラが可哀想だろ」

「俺達もサラを見くびってたな。上から押さえるのは良くないし、このまま先へ進もう」

食ってかかるエレン姉さまを宥め、ユリアンとトーマスが押さえつける。次第に落ち着いて来たのか、動きが緩慢になる。

「次は私がサラさんの代わりに戦います。だから、このまま一緒に行きましょう?」

モニカちゃんもサラちゃんの歯向かう様を見て、自分が戦闘すると庇いだした。

「勝手にしなさい! もう知らないからっ・・・!!」

激昂してサラちゃんに背を向けるエレン姉さまは、その後誰とも口をきかなかった。険悪な雰囲気のまま、私達六人は丘の上にある居城にやっと辿り着く。

(楽しんで、それで終わりと思ってた。でも、どうしてこんなに痛いほど伝わるんだろう?)

彼らの生に対する足掻きや執着が、愛おしいと思うのか 今の私ではまだ答えが出せなかった。

「やっと着いた・・・」

私達六人は雪の降り積もるレオニード城に、息もたえたえで着いた。

茶色い石造りのお城の背景に暗雲が流れ、遠くから蝙蝠の鳴く声と何かがせせら笑う不気味な声のオンパレード付き。ホーンテッドマンション。お化け屋敷を彷彿とさせるおどろおどろしさ、私達の背筋を寒くした。

「さすが吸血鬼の城だよな。雰囲気出てるよ」

「ああ、ここなら何でも出そうだ」

幼馴染同士のユリアンとトーマスが城を見上げ、顔を蒼くして感想を告げる。

私はこの中をゲームで網羅してるので、レオニード城に何が出るのか知っている。腐乱死体や骸骨、ゼラチナマスターや骸骨達の頂点に立つヤマさんまで、幅広い魔物がお待ちかねしてるとは、今の時点では語るまい。

「だ、大丈夫だよ！ こんな何とも無い・・・」

「あっ、エレン姉さま、待って！」

立ち竦む仲間達の後ろから、エレン姉さまがいの一番で重厚な扉の前に進み出る。彼女を追おうと、モニカちゃんの腕から跳び下りたが

ギギギギ・・・

エレン姉様が扉に触れようとした瞬間、勝手に両扉が開く。驚愕した彼女が取った行動とは、一番近くに居た私の白い体を抱き上げ、力強く抱き締め震え上がる事だった。

「ニヤ、ニヤオオオオ・・・い、痛いでゴザイマスル。エレン姉さまあ・・・」

「！！ はっ、ご、ごめんりオっ。っ、ついビックリしちゃって・・・」

ポキポキと体中の骨がきしむ音がして、カクカクと口から魂が飛び出そうになる。痛みには耐えかねて、私が咄嗟に出した悲鳴は猫の鳴き声だった。

恐る恐る城の中に入ると後ろから轟く音が響き、自動的に鉄製の両開きの扉が閉じられた。凝った作りに感心していると、エレン姉さまがまた強く抱きしめて来た。嬉しいけど、コレはっ！！

「ニヤオオオオ・・・」

「エレンさんっ！」

「お姉ちゃんっ！！」

「・・・はっ！ リオ、ゴメンツ！！！」

気を失いそうになる所を、モニカちゃんとサラちゃんに助け出される。普通に抱き締めてくれる分には嬉しいけど、彼女の強い腕力でハグされると複雑骨折になりかねない。生命の危機を感じ、自分で歩き出す事にした。

壁に幾つもの蠟燭が灯され、赤い絨毯が敷かれている通路を私達は固まって歩き出す。

内装は言うほど汚れてもいないし、明るく照らされ蜘蛛の巣も見当たらない。やっぱり人が一番目にする場所だけに、小奇麗にしているを見た。

奥へ進むと大きな窓があり、そこから景色が見える。暗雲からは雷鳴が鳴り響き、稲光が部屋の中を更に明るく照らし出す。

部屋の中に置かれている蜀台には沢山の蝋燭が固定され、中央に置かれた椅子には肘を付き、ゆったりと座る一人の男性が居た。

「よく来たね。私がこの城の主、レオニードだ。モニカ姫の事はロアー又侯から伺っているよ」

艶の良い背中まである黒髪が特徴の、背の高い男の人だ。

肌触りの良さそうな、これまた黒くて品の良いローブを身に纏っている。この人が着てるのが本物の“今宵のローブ”!!! ねだつたら貰えるだろうか。

「初めてお目に掛かります、レオニード伯爵様。

ロアー又侯ミカエルが妹、モニカと申します。この度は不躰な訪問にも拘わらず寛容な御挨拶、真に恐れ入ります」

六人が並んで立っている所、モニカちゃんが前に出た。進んで挨拶をして、自らのローブを左右掴みお辞儀をする所は、彼女の育ちの良さが窺える。立ち上がったレオニードさんがモニカちゃんの挨拶を受取り、手の甲に唇を寄せて紳士らしく振る舞う。

「今日は疲れたろう？ 部屋を用意しているのでそちらで休むと良い。軽食だが何か摘まめる物を用意しよう。さあ、この子に着いて行くと良い」

言つと横に控えていた精霊が動き出す。

この世界の精霊は、“アビス”の影響を受けて凶暴と化したのだが、レオニードさんの使役する精霊は、彼の支配下にあるんだろう。

本当は人間と共存できる種族なのに、それが少し寂しくもある。

「あ、あのっ、レオニードさんっ！」

「ん？ 猫が喋っている・・・君の名は？」

目を見開き絶句して、言葉に詰まるレオニードさん。

私を見て驚いてるけど、吸血鬼である貴方も驚きに値しますが？
彼への文句を抑え、少し頼みたい事が出来たのでとりあえず聞いてみる事にした。ゲーム画面上では知る事が出来なかったけど、聞いてみる価値大アリだ。

「名前はリオって言います！あの、それでモノは相談なんですが・

」

「言ってくらん」

ゴニョゴニョと言い淀む。断られるのか、否か。彼は紳士らしく、頷いて私の言葉を待っている。

「お風呂貸して下さい。それとトイレも・・・」

三大欲求には敵わないが、乙女として其処は譲れない。泥が付き、雪に埋もれ、垢にまみれたこの体を一回は洗いたかった。

006 体の触れ合い、心の触れ合い

私達女のメンバー四人は、レオニードさんの居城にてお風呂場を借りている。

モノは試した。思い切って相談して良かった。猫用のトイレも借りれたし、紳士な吸血鬼さんには言う事なしだ。

「つてかスクエ めっ！ 風呂場があるなら描写くらい入れろや」

猫用のトイレは百歩譲って諦める。でも風呂場はねえ・・・あるのと無いのとじゃやっぱり全然違う。無かったら如何しようかと思っただ。

ゲームしてる当時は、このあっさりした物語の進み具合に喜んでただけどなあ。

SFCのカセットの容量ではアレが精一杯だったのかも・・・まあ、それを補う位のやり込み要素があったから、今でも語られる位の大作と言えるんだけどさ。

一匹で悶々と某ゲーム会社の文句をつらつら連ねる。

それでも美しい風呂場がその罵倒を打ち消す位に忘れさせてくれ、新たな感動が心に芽生えた。

「ホヘエエエ〜いつい湯だっな〜 アハハン」

レオニード城にこんなあったっけ？と思う位、広々とした大浴場だ。白いタイルにジャグジーまで付いて、何でここだけ豪華やねんって、突っ込みたい。お化け屋敷さながらの外観のくせに、月術

で灯されたクリーム色の照明が温かく空間を照らし出している。

ライオンヘッドさながら、壁から突き出るキマイラを模った像の口からは、新たなお湯が浴槽に止め処なく流れる。玄武術で水が出る仕組みのシャワーが五つ位あるし、シャンプー、リンスと、体を洗うボディソープも用意されてて、濃厚な薔薇の香りに思わずうつとり。

私が浴槽に入っている場所も、真紅の薔薇がいっぱいお湯に浮かんでいるんだ。しかも一個じゃないよ！ 青い薔薇、紫の薔薇、白い薔薇と四種類もそれぞれ入れられる様に浴槽が作られてて、どうやら匂いも効能もそれぞれ違うらしい。一生分の贅沢を詰め込んだかのような待遇に、初めて猫になって良かったと思える様になった。

一匹で優雅にスイスイ猫掻きして泳いでいると、スモークがかかったガラスの扉が横に開く。

「リオちゃん、もう行くの早いんだから！ 私と一緒に入って欲しかったのにい」

「私も。後でリオちゃんの体を洗いたいです。」

「リオは私達と違って服を着てないからね。私達より先に入れるのは当たり前だよねえ？」

「うっ、うん！ そうなんだよっ」

両手でタオルを押えて体を隠しながら、美人シスターとお姫様モ二カちゃんが入って来たっ！！ 皆はここで頭も洗うつもりなんだろうつか。エレン姉さまと妹のサラちゃんも、長い髪の毛を下ろしている。

「・・・わっ、この景色って、外からじゃ絶対見れない位置にあるからガラス張りなんだあ。この景色は絶景だよね、お姉ちゃん」

石の桶でお湯を体にかけて洗い流し、お湯の中に半ば浸かりながらガラスの窓に手を付け眺めるサラちゃん。隣に居るエレン姉さまに問い掛ける。どうやら姉妹は仲直りしたみたいだ。・・・本当に良かった。

「丘の上にある位だから、こっち側は断崖絶壁なんだろうね。でも雪がヒラヒラ降って、これはこれで風情があるよねえ・・・たまにこの城の周りにだけ、雷が鳴ってるのがちよつと気になるけど」

四角形の窓から見える縦長の雷が、時折部屋を照らし出す。エレン姉様は雷は平気で、逆にサラちゃんは雷が怖いみたいだ。

「ここまで来るのは至難の技でしたしね」

「ホギヤツ！」

クスリと笑い、私を胸に抱き寄せてくれたモニカちゃん。

ちよつ、生胸が背中当たってるよつ！ 私も乙女のはしくれなのに、照れてキタツ！

「ミカエルお兄様が伯爵様を頼る気持ち分かりました。彼は吸血鬼で有名ですけど、とても真摯な態度で私達を受け入れてくれたんですもの。疑っていた私が浅はかだったんだわ」

「モニカちゃん・・・」

“タダより怖いモノは無い”って言う、格言が元居た世界にあったと言う事はこの際伏せておこう。今の所、レオニードさんの信条とやらは明らかにならないのだから。

「フフツ、リオちゃん。くすぐつたいです」

「・・・」

モニカちゃんに向き直り、顔をペロリと舐めする。

白く透き通るような瑞々しい肌と柔らかな胸に、元居た世界の心友、橋ノ蔵奈美ちゃんの姿が重なった。胸関係だけに、彼女のお姉さんを思わせる優しい気持ちと、昔過ごした記憶が蘇る。

(元気にしてるかなあ、みんな・・・)

家族の皆

フラインシャートの皆

魔族の皆

それから・・・守護獣ガウラ。

出会った人皆とは言わなくても、良い人間や仲間には恵まれてる方だと思うよ。この大好きなロマサガ3の世界を、出来ればガウラと一緒に冒険したかった・・・

「・・・？ きゃ、きゃあつ、リオちゃんがグツタリしてる！」

「ええっ！ リオちゃーん、大丈夫？ 早くお湯から上がらせな
いとっ！」

「何だつて！！ タツ、タオルにくるんで外で冷やせばなんとか・・・」

サラちゃん、エレン姉さま、モニカちゃん、ユリアン、トーマス、今は此処に居ないハリードも皆私に優しい・・・特に何かをしなればならないと言う事は聞いていないけど、この世界でも何かを得る事が出来ると思うんだ。それを見つけるまで、私はきつと帰れない。

006 体の触れ合い、心の触れ合い（後書き）

SFC・・・スーパーファミコンです。

当時はこれでよく遊びまくってました。

今は手元に無く、凄い残念。

007 体の触れ合い、心の触れ合い(2)

「ニヤオオオオ・・・やわらかいマシユマロが六つも押し迫って来るう・・・もう食べれませえん。勘弁してええ・・・」

「リオちゃん、大丈夫？」

お風呂でのぼせた私は、柔らかいタオルを下に敷いて熱を冷まして貰っていた。

髪をタオルで纏め上げたサラちゃんが、タオルでパタパタと仰いでくれている。精霊さんに着ていた服を洗って貰って、もこもこした白いルームウェアを借りて着ていた。

「リオ、お水持って来たけど飲めるかい？」

「ブフオツ！」

エレン姉さまは白いカッターシャツに、ズボンをはいていた。でもサイズが合わないのか、胸元のボタンは開けられ中から黒いブラが見える。ズボンのボタンもちゃんと留めていないから、おへそがチラ見えして・・・

「リオ？」

「・・・エレン姉さま、凄すぎますう」

コップに注いだ水を屈み込んで持つてくれているので、胸の谷間がくつきり全開だ！美人な上に強くてナイスバディ・・・神は三物を与え給うたのか。自分のペタンコな白い胸を睨み付けて、深く溜息を吐きたくなった。

「リオちゃん、気がつきましたか？」

「モニカちゃん、ゴメンネ。心配かけちゃった・・・」

光沢のある、滑らかなピンク色のネグリジエを着たお姫様改め、モニカちゃん。半生乾きのブロンドの髪を下ろして、心配そうにタオルで私の体を拭いてくれている。決して風邪を引かせない様に、優しく水気を拭き取ってくれた。

「あつ、そう言えばここは？」

貰った水をゆっくり飲み、周りをキョロキョロと眺める。

十畳はある部屋の床には赤い絨毯を敷き、洋服ダンスに複数のベッド、四人位座れる丸いテーブルセット、姿見の鏡などが置かれていた。

「私達は先に休める様に、部屋へと案内して貰ったんだよ。ユリアンとトーマスの二人が、入れ替わりにさっきの大浴場にも行ってるってわけさ」

「ホオオ・・・」

ロマサガ3で言えば、きつとお風呂イベントに違いない。

もしかして神様が・・・いや、違った。エリーちゃんが用意してくれたサプライズかもしれない！！ どっちにしろこんな貴重なイベントに、自分は気を失っていたなんてとんでもない馬鹿な猫だ。

「リオが目を覚ました事だし、先に夜食を頂いちゃおうか？」

「えっ、ユリアン達を待たなくて良いの？」

「実は、二部屋も用意して貰ってさあ。向こうは向こうで食べようかって言ってたんだよ」

悔しげに短い足で地団太を踏んでいると、エレン姉さまが私を抱き上げてくれた。丸いテーブルの上に近付き、椅子の上に下るされる。傍にある呼び鈴を鳴らすと、ドアの外からノックの音が聴こえた。

「軽食ですがどうぞ」

茶色の髪をした女の人がワゴンを押して、部屋に入って来た。見掛けは普通の人間にしか見えないけど、この人もレオニードさんが使役する精霊さんだ。

アビスの影響を受けて、自らの魅力を武器にして戦いを挑んでくる妖精さんもいる。彼女らの正気を取り戻す為にも、早く“アビスゲート”を閉じなくちゃね。並大抵の鍛錬じゃ、まだまだ私には無理だけど。

「ニヤ、美味しそう・・・イタダキマウス!!」

「リオちゃん可愛い！ 私もイタダキマウス！」

「い、いただきマウス・・・は、初めて言いました」

「プツ、猫が“マウス”って・・・。リオ、よく噛んで食べなよ。

口の周りにマヨネーズがいつぱい付いてるよ」

大皿の上には美味しそうなサンドウィッチと、から揚げにフライドポテト。

ジュースが入ったグラスもそれぞれ用意してくれてある。サラちゃんに食べ物をそれぞれ小皿に取り分けて貰い、皆で手を合わせて食べ切った。

けたたましい嘲笑いが、レオニード城の怖さを引き立たせる。

柳に似た大木は風に靡き、吹雪いた白い世界は人間を迷わせる。
寒さに強い狼の遠吠えと、蝙蝠の鳴き声をBGMにして一夜が過ぎた。

「ニヤオオ・・・今日はあるまん、明日は肉まん、あさつてはピザまん・・・ノオオ」

肉まん達がせめぎ合って、押し寄せてくる夢を見た。

息苦しくて目を開けると、モニカちゃんとサラちゃんの間挟まれていた。彼女達が同じベッドで眠っているのを不思議に思い、起き上がると・・・

「ニヤ？」

目を凝らして見ると、同じベッドにエレン姉さまも座って熟睡していた。この部屋にはベッドが四つもあるから、皆はそれぞれの場所で眠っていた筈なのに。いつの間にか逆ハーレム状態になっていた。

私が男なら、きつと鼻血を出して地に伏すに違いない。少しばかりニヤけていると、外を繋ぐドアの向こう側からノックの音が聞こえた。

「おーい、もうそろそろ起きろよ。早く飯食べて、レオニード伯爵の所へ行かなきゃならないんだから！」

ユリアンからの連絡を聞き、急いで皆を起こす事に。用意してくれた朝食を急いで食べて、皆でレオニードさんの所へ移動した。

窓から朝日が拝めるだろうと言う予想を、大いに覆してくれた摩訶不思議なお城。

どうして入り口と反対の方向には、いつも稲光が出てるのか。

晴天を覆い隠す様に、暗雲が流れているのか。レオニード城の七不思議に、リストアップする事を自分で決定した。

「おはよう、昨日はよく眠れたかな？」

「おはようございます。レオニード様のご意向で、昨日はよく眠れました」

「そうか、それは良かった。実はミカエル侯からの伝書によると、まだ反乱を鎮圧していないみたいだ。

暇潰しとまでは言わないが、この近くにある洞窟に行ってみたらどうかな？」

「洞窟ですか？」

ここから少し離れた場所にある洞窟は、初心者の冒険者にはうつつけらしい。序盤での武器・防具やらが手に入るみたいだからどうかと、勧めてくれた。

通過儀礼みたいなものだ。このイベントをクリアしないと、ミカエルさんが反乱を鎮圧する事件がいつまで経っても終わらない。ここで断る理由も無く、一同はポドールイにある洞窟を目指す事にした。

007 体の触れ合い、心の触れ合い(2) (後書き)

ロマサガ獣記を書くとき、 “白呪記” を書くのが遅くなる。書いてると楽しいし、どっちに重点を置こうか悩んでいます。タダでさえ話を書くの遅いのに・・・とりあえず、書きたい時に書く。このスタンスで行こうかと思えます。

008 ポドールイの洞窟

レオニードさんにポドールイ近辺が載ってる地図を貰い、皆で洞窟に向かう事になった。

冒険とは名ばかりの、早く言えば時間潰しの為に勧めたんだろう。

「・・・あれ？」

「どうしたんだ、リオ」

ユリアンの手に持つ地図を、下から手を伸ばして引ったくり、上から下まで眺める。レオニード城とポドールイの町、それから洞窟の場所がある所しか印を付けられていない。

やっぱり地図には他の町の名前が載ってなかった。

船で訪れたり、情報を聞いて、イベントで通過しないと町やダンジョンには行けない仕組みになってる？ 無駄な所まで忠実にしなくても良いのに・・・これは、本格的に冒険をしろと言うエリーちゃんの思し召しか。

「マッチョじゃないけど、色々と鍛えて棍棒の達人になってやる！」

「マッチョ？ リオちゃんのマッチョ、あんまり好きじゃないかも」
サラちゃんに抱き上げられて、皆で城を後にする。

ヘルタイパー
鷹や翼手竜を何とか撃退して、狭くて滑りやすい坂から広い面積に落ち着く事が出来た。シノンの森でハリードに頼り、弱い面を見せていた皆は目覚ましい成長ぶりで、遂に町の外にある洞窟へと辿り着く。

ポドールイの洞窟

山の麓にある洞窟の中は暗かったが、所々に何故かランプが灯されて進みやすい。ただ、やっぱり狭くて湿り気のある空間には魔物が多かった。

「げっ、カエル！ ユリアン、トーマス、後は任せたよ！」

元居た世界のアマガエルよりかは、勿論デカイ。肥えた体は虫以外の、それこそ人間まで食べてここまで育つたに違いない。

バーナード犬並みの大きさなんだ。生理的に受け付けないのは、何も彼女だけじゃない。サラちゃんやモニカちゃんも、カエルから距離を遠く取っている。女の子なら、躊躇する気持ちはよく分かる。

「ちよっ、エレン、お前ならキックでも斧でも一撃でいけるじゃないか！」

「いやーだ！！ 植物や昆虫は攻撃出来ても、カエルだけは素手でも武器でも触りたくないね！」

上から落ちてくるバラ系植物の魔物に斧で真つ二つ、兵士系の骸骨には跳び蹴りをかましたエレン姉さま。水気を含んだ壁や天井から、物影に隠れて飛び出す魔物など、初心者を楽しませようと多様に富んだ攻撃を仕掛けて来る魔物達。最強の彼女でも、カエルには弱いみたいだ。

アマガエルに似た特大の魔物をサラちゃんの弓で仕留め、次々と宝箱を開けて行く。

地面に置かれた宝箱、洞窟で朽ち果てた冒険者の亡骸からと様々な所に置かれてあった。生命の大もと、小盾、小手、精霊石や、口

マサガ3でのお金、三千オーラム以上見つける事も出来た。

生命の大もとは、熱帯地方にある“アケ”という村で“生命の素”に作り変えて貰える。

効果は一人のWP（技ポイント）・JP（術ポイント）と、LP

ライフポイント

の完全回復だったはず。非売品だし、これも超貴重品だがこのままじゃ使えないし、後に取って置くから今は全然使えない。

ライフポイントは、それぞれ各個人に設定されており、決まり事もあった。

キャラが持つHPを上回る攻撃を受けた場合、気絶した状態になる。気絶状態を放ったままにして、敵から攻撃を受けるとライフポイントが一つずつ削られていき、全部の数値が無くなった場合、本当の“死亡”となる。少なくなったライフポイントを回復するには、宿屋で回復するか、専用のアイテムで回復するしかなくて、いつまで経っても数値は変わらない。

シノンの森で気絶したエレン姉さまは、ライフポイントを一つ削られ、気絶した。あの状態のまま、もし後九回攻撃されたら、ロマサガ3の世界で存在を抹消されていただろう。

“末梢”の文字が頭にちらつき、私は激昂したんだ。

FFで言えば、リミットブレイクしたという感じ。能力はあんまり上がってなかったと思うんだけど、それでも勇気だけはいつもの倍は湧いたと思う。

「おかしいな・・・ドコにあるんだろ？　ねっ、皆・・・ってアレ？？」

あの時のエレン姉さまの事を思い出しながら歩いていたら、どうやら一匹で奥まで来てしまったらしい。どうしようかと唸っていた

ら、前方に深い谷底があり、その先の向こう側に渡れる地面があった。

私でも走ってジャンプすれば行ける場所だ。助走をつけて跳び上がるとナイスに着地して、人間の屍に近づき落ちていた物を拾い上げる。回復機能を持つ“生命の杖”をゲットした。

「やった〜！ “生命の杖” 見つけ！ さつて、皆の所へ合流しないと・・・?!」

「ゲエエコ、ゲエエコ」

「カタカタカタ！」

「ゴブゴブツ」

喜びも束の間、後ろを振り向くと向こう側にある着地点に、カエルと骸骨とゴブリンの魔物がわらわらと集まっていた。知能があるのか、谷底に落ちる事も無く、彼等は私がこちらに来るのを待っている。

「・・・どうしようっ、向こうに渡れない」

杖を固く握りしめ、その場で身動き出来なかった私は仰天する。

シュツ！

「はっ?! ちょっと、なんなの・・・! 猫は食べても美味しくないよっ」

カエルの長い舌が私に伸びてきて、体に巻き付いた。カメレオンも真つ青の舌の長さぶりに驚きつつ、必死になって足掻いても無駄だった。

「ニヤオオオオ!!」

悲鳴を上げて、必死に助けを呼んでも誰も助けに来てくれない。力を込めて踏ん張っても、凄い力で引つ張られる。

(もう駄目だ!!)

イタダキマスとカエルの大きい口に寄せられた時、今まで聴いた事のない、女の子二人のドスの効いた低い声が洞窟内に響いた。

「誰の許可を得てリオちゃんを食べるのですか？ 冗談は顔だけになさい!! アクセルスナイパー!!」

「私のリオちゃんに何するのよ・・・混倒滅殺、イド・ブレイク!!」

モニカちゃんが持つ小剣での先制攻撃、その後畳み掛ける様にサラちゃんがカエルの腹目掛けて弓を撃ち放つ。カエルの動きを一旦止めて、的を絞り、弓で腹を貫通したカエルは見事に崩れ落ちた。

イド・ブレイクは混乱の効果もあるが、WP(技ポイント)も使うため普通の攻撃よりも強力だ。混乱に陥る暇も無く、天に召されたようだ。

「モニカちゃん、サラちゃん!!」

「リオちゃん、また一人で歩いて。心配したんですよ?」

「今助けるから、ちょっと待っててね!!」

舌が巻き付いたままの私は、モノ言わぬカエルの体の上に倒れ込んだ。

私の近くには複数の骸骨とゴブリンがいるから、倒せるまで近付いてもらえない。身動き出来ずに待っていると、彼女達の後ろから何かを引きつった音が聞こえて来た。

「エ、エレン姉さま！・・・ユリアン、トーマス？」

「いやあ、モニカ様とサラの走る速度に、早くて追いつけなかったんだよ。だから二人を引きづって来ちゃった」

「・・・かつこ悪い所見せちゃったな」

「同じく・・・」

エレン姉さまに襟首を掴まれ、引きずられて少し疲れ気味のユリアンとトーマス。バツの悪い顔で喋る二人に、モニカちゃんとサラちゃんの低い声が彼らに告げる。

「早くゴブリンと骸骨を倒してください・・・私達はリオちゃんを助け出しますから」

「お姉ちゃんも良いよね？ カエルはもう居ないもんね・・・？」

有無を言わさぬ様に言い放つ彼女達に勿論異論は無く、エレン姉さま率いるユリアンとトーマスに魔物達を退治して貰う。モニカちゃんの小剣で舌を切って貰い、長いカエルの舌を両手でサラちゃん がわし掴みして、私はやっとの事で助け出された。その後、皆からお説教されながらポドールイの洞窟を出る。

ポドールイの洞窟を攻略した後、一同はまっすぐポドールイの町に戻る事になった。

魔物との戦闘で傷ついた体を宿屋で回復させて、雪の降り積もる居城に難なく行ける様になった私達は、早速城内の通路を皆で通る。突きあたりの大きな窓がある場所まで来ると、レオニードさんが椅子に座って待っていた。

「朗報があるよ。ミカエル侯は無事に反乱を鎮圧する事に成功したみたいだ。早速ロアー又に戻ると良い」

「お兄様が・・・そうですか。レオニード様、ありがとうございます。これからロアー又へ向かいます」

モニカちゃんが貴族らしくお辞儀して、私達を促す。

皆が先に出口を繋ぐ扉へ歩き出している時、私は振り返って彼に近づき、この城にまた来て良いかと窺ってみた。

「レオニードさん、またこの城に遊びに来ても良いですか？」

嫌と言われてもまた来るけどねと、心の中でほくそ笑む。許可云々より、要は声をかけとけば怒られないだろうと企んだ。この城の地下の攻略もいつかしたいし、仲良くなればベッドやトイレ、お風呂も借りれる。したたかに生き抜く為だ。お釈迦様も許してくれる・・・あつ、この世界の亡霊で確か仏像もどきの魔物もいたっけな・・・祈ってもムダだった！

「ニヤオオオ・・・神も仏もない、罰当たりな世界だったのか」

「フフ・・・面白い事を言う。いいよ、またと言わずにいつでも来ると良い。君なら大歓迎だ」

立ち上がり、頭を抱えて悩んでいる私の傍まで来ると優しく抱き上げられる。吸血鬼特有の美貌を持つ、美しい顔の位置まで高く上げられると、こう告げられた。

「神聖な色を纏う純白の猫リオ、君が放つ微々たる闇に何処まで気付いているのか・・・」

「えっ・・・？」

「またおいで」

薔薇のほのかな香りが、私の鼻に微かに広がる。

額に口付けされて、いつの間にか雪が降り続くお城の外に居た。鼻先に当たる冷たい雪が、惚けた意識を現実に引き戻させた。

「さっ、さぶいつ、ブファックシュ!!」

その後ユリアン達が来て、一同は興奮と驚きに包まれる。

「外に出たらリオちゃんが居ないから、中へ一旦戻ったんだよ！

レオニードさんに聞いたらもう外に居るって言うし・・・驚いちやった」

「私も驚きました。外と中を繋ぐ通路は一本しか無いのに、私達に姿を見せる事無く外へ出たんですもの。不思議です」

「リオはホントに凄い猫だな。喋れるし、戦えるし、二足歩行できるし!! 大したもんだよ」

「城の扉が勝手に開く所から、考えるのを止めたんだ。今更どうにも言わないけどな・・・」

「リオッ、あんたはいつも急に居なくなるから、心配ばかりさせ

て！ でも見つかったよ・・・」

サラちゃん、モニカちゃん、ユリアン、トーマスの順で心配された。

エレン姉さまにも強く抱き込まれ、しばし反省。移動した本人が一番よく分かってないんだから、皆に分かるわけない。彼らの優しさに触れて、皆でロアーヌへ戻る事になった。

ロアーヌ

ロアーヌ地方にある港町ミュルスから、ミカエルさんが治める城下町にやって来た。

町はミカエルさんの武勇伝で賑わっていたから、外で喋っていたおばさん達に事の成り行きを聞いてみた。ロアーヌ侯家の血縁でもあるゴドウィン男爵が、ミカエルさんのお父さん、フランツさんを暗殺した時から遡るらしい。

自分が玉座を持つ地位を狙いたいが為に、今回はモンスターとも協力してロアーヌを占拠した。それも、当主のミカエルさんが魔物の討伐で遠征して居ない時を狙ってだ。このタイミングの良さに、頭が切れるミカエルさんは疑問を持ち、ゴドウィン男爵が実行に移すまで動向を泳がしていたみたいだ。

予想が的面とはいえ、内部にいる部下からの裏切りに苦い思いを与えられたらしいが、最終的に反旗を翻してゴブリン軍団を奇襲したため、ロアーヌ軍にも戻れたと言うドラマをおばさんは片っぱしから喋る。熱が冷めるまで、暫くこの話題がロアーヌで持ちきりになるだろう。

モニカちゃん決死の逃亡が、功を成したのもある。

反乱の旨を聞いたミカエルさんが迅速に対応し、町に居る魔物も

倒したんだ。見事にゴブリン軍団と、ゴドウィン率いる兵士達を退けた後、ミカエルさんとハリードは首謀者のゴドウィン男爵を退ける事に成功した。

「モニカ姫がご無事で良かった。あたしや、それが心配でねえ」

「わしもじゃ。もうあの美人兄妹が見れなくなると思うと、心残りでも死んでも死にきれんわい！」

「おばさん、おじいさん。心配してくれてどうもありがとう・・・」
「モニカ様・・・」

おばさんとおじいさんと別れ、ユリアンがモニカちゃんの背中を押して宮殿へと一同歩く。城下町よりも高い位置に建てられているから、見張り台から町やミュルスを一望できる造りとなっている。石造りの宮殿の中に入れて貰い、少し進むと見知った顔を見つけた。

「ハリード！」

「よっ」

玉座へと続く扉の近く、腕を組んで壁に寄り掛かっていた。アジアン風味の服を着て、曲刀を腰に引っさげるその姿は以前見た時と変わらない。思わず駆け寄って背中に跳び乗った。

「どうしたんだい、こんな所で？」

「おっさんの事だから、きつとミカエル様にかめつく交渉してると思っただよ」

紳士トーマスと、エレン姉さまが笑いながら喋りかける。皆の顔も晴々してるし、この一件がちゃんと落ち着いたという事が伝わって来た。

「皆を待つてたのさ。さあ、中に入るぞ」
しがみ付いた私を背に乗せたまま、ミカエルさんが待つ玉座へと歩いた。

「この難局を乗り切る事が出来たのも多くの者達のおかげである。特にハリード、トーマス、ユリアン、エレン、サラ、リオ。お前達は私の家臣でもないのに良く働いてくれた。ロアーヌを代表して礼を言う」

玉座の前に佇んでいたミカエルさんが、私達に感謝の意を込めて答えてくれた。

猫である私はハリードにおぶさり、他の皆は横に並んで連れられる言葉を聞いて行く。

上の人を敬う様な立ち振る舞いは皆も分からないので、本当に並んで立っているだけだ。モニカちゃんは、いつもの旅装束姿ではなく正装した姿で、もう一人手前で佇む髪の長い女の人と一緒に、ミカエルさんの一挙一動を見ていた。

「まあ、当然だ「イイってことよ!」・・・ふぐっ」

「リオちゃん・・・」

ハリードの肩から顔を覗き出して、猫の手で口を塞ぐ。いつものがめつい発言を遮ってやった。

懐が広いミカエルさんは、それでも恩賞を取らせてくれるみたいだ。正装したドレス姿のモニカちゃんが皆にお礼を伝え、最後は談笑に浸る。

ゴドウィン男爵から無事にロアーヌを取り戻したお礼も兼ねて、ミカエルさんが私達をロアーヌの宮殿で泊まらせてくれる事になった。勿論夕ご飯もご馳走になって、祝杯を挙げる兵士の人達と笑い合う。

「イツキ、イツキ!!」

「プハアア〜!」

「いよつ、猫のお嬢ちゃん、威勢がイイネツ」

「猫舐めんなよ! 何でも飲めるよつ」

毛むくじやらの左手を腰に当て、ジヨッキの手で持つ部分に右手を突っ込んでオレンジジュースを一気飲み。ポツコリと出た白いお腹を撫でて、座っていた椅子から降りて床にごろ寝する。

食堂の一室を借りての祝杯は、宴たけなわだ。料理人さんが忙しそうに食べ物を作り、侍女さんも兵士の人達にお酒を注いでいる。無礼講のお祭り騒ぎに、ハリードやミカエルさんも楽しくお酒を飲んで、ユリアンとトーマスはお肉料理にかぶり付き、モニカちゃん、エレン姉さま、サラちゃんがデザートを食していた。

お腹を上にしてそのまま寝そうになった時、近くに誰かが寄って来た。

「白い猫? 私はカタリナと申します。この度はモニカ様の助力に貢献してくれた事、真にありがとうございます」

「えっ、あつ! 私はリオって言います。私の方こそモニカちゃんに助けて貰う事もあつたし、そんなに大した事はしてないんですが・
・
」

しゃがみ込み、視線を合わせて感謝の言葉を告げられる。

紫色の長い髪を纏め上げ、しっとりしたビロード調のドレスが彼女の美しさを引き立たせる。彼女に近付いてみたくて、白い手を伸ばしたら横から抱き上げられた。

「リオちゃん、彼女は私の侍女のカタリナで、剣の腕前も一流なの」
「よろしく、リオ様」

「猫ですが、よろしくお願いしまっす！」

モニカちゃんに抱き上げられた私は、大人しく彼女たちの話を聞く。カタリナさんは、モニカちゃんが居なくなつた後に裏切つた大臣さんに牢屋へ閉じ込められていた。けれど、隠し持つてた牢屋の鍵で外へ出たらしい。

ゴブリン軍団を退けたハリードとミカエルさんの二人と合流して、玉座に居るモンスターを引き連れた親玉を無事に退治したと教えてくれた。その代わり、取り逃がしたゴドウィン男爵の行方が知れないとも言っていた。

「ゴドウィン男爵は捕まらなかつたんだね」

「そうです。奴をこの王宮から遠ざける事に成功はしたのですが」

私の言葉に、モニカちゃんとカタリナさんは浮かない顔だ。

そりゃそうだ。悪の根源を正すか絶たないと、いずれまた何処かでチャンスを伺つてるかもしれない。私はこの後何が起こるか分かつてるから、ここで彼女に忠告した方が良いのか迷つてる。

「ニヤオオオ・・・」

「リオ様、今日はごゆるりとお休みください。では、これにて失礼します」

「カタリナも、ゆつくり休んでちょうだい」

「ありがとうございます、モニカ様も疲れた体を癒して下さい」

迷ってる間に、カタリナさんが食堂を後にした。

モニカちゃんに連れられて、エレン姉さまとサラちゃんの場所へ戻る。そろそろ寝る頃だと言うと、女の子四人、同じ部屋で寝ようかと言う話になった。

「リオちゃんはこつちです！」

「こつちで寝るの！！モニカ様はドでかいベッドで寝るんだから良いでしょ？」

「だったらサラさんが私のベッドで寝れば良いんです！ さあ、どうぞ」

「モニカちゃんはお姫さまなのに、床で寝かせるわけには行かないよ……」

モニカちゃんの部屋で寝るには良いが、肝心のベッドが無い。

ベッドが無いから絨毯の上で毛布を敷いて、そこで私達三人は固まって寝ようかと話し合っていたんだ。

彼女達の睨みあいの最中、エレン姉さまはもう毛布の上で寝かけている。静かに動いて、彼女の傍で丸くなって眠る事にした。そこで見た夢は、私が元気に口マサガ3を冒険している姿だった。

010 リオの新たな冒険

ロアー又山脈に朝陽が昇る。

私を入れた七人は、ロアー又奪還から宮殿で一夜を過ごし朝を向かえた。軽い朝ごはんを食堂で頂き、謁見の間でミカエルさんにこれからどうするかと談笑してたんだ。そこへ

「カタリナツ！ どうしたの、その髪・・・？」

一人の女性が瞳に決意を表し、ミカエルさんの居る玉座まで進みだした。

目を見開き絶句したモニカちゃんが驚いたのは、彼女の腰まであった紫色の髪が首元までばっさり切り揃えられていたからだ。

和やかだった空気が一転、静寂が部屋を支配する。

「・・・ミカエル様、マスカレイドを盗まれました。本来なら自害するのですが、今一度、取り戻す機会をお与えください」

私を入れた七人は、玉座に近づく彼女の言葉を静かに聞く。ピロイド調のドレスを脱ぎ捨て、今着ている服装は既に旅人が着る様な服だ。

彼女の好きな色なんだろうか、髪の色と揃えた薄紫色の上下服にマントと一本の大剣は、これからの旅立ちを意味するいでたちだ。床に片膝を付き、ミカエルさんの返答を待っている。

「その髪は決意の表しか・・・良いだろう、無事に取り戻してみせよ」

「ありがとうございます。では」

「しかし、お前ほどの人物に取り入るとは・・・どうやって盗まれたか聞いてもいいか？」

「・・・それだけはっ」

「言いたくないのならそれでいい。取り戻して来るまではロアーヌに帰途する事は許さん」

「はっ、無事に取り戻して参ります」

「カタリナッ」

颯爽と謁見の間を出るカタリナさんに、モニカちゃん以外は誰も言葉を発する事が出来なかった。

「ニヤ・・・」

心にポツカリと穴が空いた気持ちになるのは何でだろう？あんなにロマサガ3が好きで、イベントを見るのも楽しみにしてたのに。実際間近で見ると、自分の力無さに虚しさが込み上げてきた。

「リオちゃん、元気出して。カタリナさんには、きっと何か事情があったんだよ」

「元気出せよ、お前が元気無かったらこっちまでへこんじまうんだぞ」

「サラちゃん、ユリアン・・・」

テーブルにユリアンとトーマス、エレン姉さまとサラちゃん、そしてサラちゃんの膝の上に座った私と、カウンターに座っているハリード。

モニカちゃんと別れた六人はロアーヌにある港町、ミュルスで船の出港を待つ為に少し時間が余ったので、パブでこれからの話をし

ていた。

「俺さ、ロアーヌの騎士になってモニカ様を守るんだ！ 皆元気で暮らせよっ、じゃあな！」

「！」

「ユツ、ユリアンツ！」

ユリアンのお馬鹿めっ！

エレン姉さまが好きだった筈なのに、モニカちゃんを追いかけやがった！！ 案の定、斜め向かいに座ってる姉さまは額に青筋付けてるっ！

「エレン姉さま・・・」

「お前達はこれからどうするんだ？」

後ろから声を掛けて来たハリード。

空気読もうよ。今エレン姉さまに近づくとやばいって事に。

「リオ、お前はどっするんだ？」

「へっ、私・・・？」

おおっ、皆の話が先に進むのを待ってたんだけど、コツチに飛んできたか。

昨日の夜からずっと考えてたんだ。ロアーヌを奪還する事に成功した後は、きつと皆バラバラになるって。一匹で旅するなんて無謀な事は出来ないし、大好きなエレン姉さまについて行こうと考えてた。

「お前さえ良かったら、一緒に俺と旅をしてみないか」

「私、エレン姉さまについてこうと思っ「リオちゃん！！」・・・

げふっ」

私の言葉を遮って、サラちゃんが力強く抱きしめて来た。頬にすり寄せてくる行為は、この世界には居ない守護獣ガウラを思い出す。

「リオちゃんも、私とトーマスと一緒にピドナへ行こうよあ」

「サラ、リオの意見を聞かないと駄目だろう？ リオ、君はどうしたいんだ。勿論俺もサラと同意見で、一緒に来てもらえると日々が楽しくなりそうだ」

「・・・リオ、私も大歓迎だよ。あんたとの旅、面白そうだもんね」
「み、みんなあ」

おおお、四人に誘われとる・・・！

金の瞳からじわりと涙が出そうになり、もじもじして、サラちゃんを見上げる。すると彼女は笑ってくれた。

「猫だけど、改めて宜しくお願いします！」

「宜しくね、リオちゃん。一緒に楽しもうね」

「うーん、リオが行くなら私もピドナへ行こうかな」

「俺はパスな。お前達と別れるのは名残惜しいが、しょうがないか」
「ハリードは来ないのか？」

「俺はランスにでも行くよ。聖王廟にでも寄ってるから、近くまで来たら声でも掛けるよ。じゃあな」

サラちゃんの歓迎に、エレン姉さまも共に来る事になった。

トーマスの問いに、ハリードは別行動をすると皆に告げる。膝の上に抱き込まれてる私の頭を撫でて、彼はパブから出て行った。

さよならなんか言わない。

だって、また会えるもん。
私がこの世界に居る限り

イレギュラーな存在の私がここに居るだけで、既に物語は変わっているのだ。別行動をするエレン姉さまだって、本当はハリードと一緒に聖王の子孫が居るランスへ行く筈だったんだ。でも彼女は私達と一緒に行動してくれるみたいだし。

「マスカレイド・・・聖王遺物」

「リオ、マスカレイドってカタリナさんが言ってた物か？」

「うん。確か小剣で“ウエイクアップ”って言う技を出したら大剣になる、世界に二つと無い優れ物だったと思うよ」

博識のトーマスが、私の呟きにいち早く反応した。

聖王遺物を得る為に、何者かに強引に奪われたり罾を仕掛けられたに決まってる。カタリナさんも、それに引っ掛かってしまっただけなんだ。

ゲーム画面では絶対に会う事は無い、カタリナさんだって運が良ければまた逢える。私の行動次第では、普通は仲間になれない人がメンバーに加わってくれるかもしれない。それを考えただけで、胸がわくわくと躍りそうだ。つまり、もう私の冒険は始まったも同然。

「さっ、もう時間だよ。港に行ってみようか」

「うんっ！」

「リオ、あなたは船酔いするからねえ・・・船酔いの薬も買わなきゃね」

「道具屋に寄って、それからピドナへ行くか」

ガウラの世界にはまだ帰れそうもないみたいだ。これが夢落ちじやなきや、ガウラにお土産持つてくのかなあ・・・私、猫の姿で口マサガ₃を充分堪能するからねっ！ ちよつと寄り道するから女神、エリーちゃんフオロー頼むよ！

011 ピドナと魔王殿

猫の私リオ、麗しのエレン姉さま、その妹サラちゃん、眼鏡を掛けた紳士トーマスはロアーヌにある、港町ミュルスから世界最大都市のピドナへとやって来た。

ピドナには新市街と旧市街があつて、“魔王殿”と呼ばれる観光名所まである。それをウリにして客を呼ぶくらいなんだから、この市民の人はそれ程不安には思つてはいないのかもしれない。

「おいしっ！ この町名物のピドナまんじゅう、なかなかイケますな」

まんじゅうの表面に、想像された魔王の絵が刻まれている。口が開いた可愛いドラゴンの絵で、押印されていた。

「それは良かった。ほら、エレンもサラも温かい内に食べなさい」

新市街にあるパブに入って、猫の私がマスターにまんじゅうを頼み込む。猫が喋っているのを見たマスターは、驚きの表情で私を見たが今はもう普通に接してくれる。トーマスに人数分のお金を払つて貰い、テーブルで食べる事にした。

「ありがと、トーマス。はい、お姉ちゃん」

「有り難く頂くよ。ムグ・・・美味しい。でも、よくリオはピドナ名物の事を知ってたね。前にもここに来た事あつたのかい？」

「むぐぐっ・・・！」

エレン姉さまに痛い所を突かれた。私、ここから遠い所から来た

事にしてたのに!!

皆より先に前に出て、パブの場所に一番乗りし、名物のまんじゅうまで強請ねだったんなら、ここに精通してなきゃおかしすぎる。やべつ、自分で墓穴掘った!

「えつと、えつと、わ、私猫だから、鼻がよく利くんだよ。この場所から、美味しそうなまんじゅうの匂いが外まで漂って来たんだよ」「そ、そうなのかい?」

椅子に座った私の白い背中をゆっくり撫でて、飲み物を渡してくれるエレン姉さま。温かいフルーツティーを飲み、サラちゃんに抱き上げられてパブを出る。新市街にあるトーマスの家に寄せて貰い、おじいちゃんに出迎えられて部屋へ案内され、ヒト心地つく。

「俺、ちょっと用事があるから皆はここで休憩するなり、観光でもしたらいいよ」

「えつ、トーマスどっか行くの?」

「直ぐに帰ってくる。暇ならピドナを観光しても良いし、旧市街にある魔王殿を見に行ったらどうだ?」

トーマスはそう提案して、自分の家から出て行った。残された私達三人は、お互いの顔を見合わせる。

「だつてさ。サラはどうする? ピドナを見て回る?」

「ううーん。“魔王殿”なんて、怖そうな所にはあんまり行きたくないけど・・・リオちゃんは如何したい?」

「あつ、あのつ。私、魔王殿の中を見たいっ! お願いエレン姉さま、サラちゃん!」

二人に頭を下げた頼み込む。ロマサガ3に来たら、是非とも見たい名所トップ5に入ってる。

一位はレオニード城、二位は海底宮、三位は聖王廟、四位は雪の町、五位が魔王殿。どの場所へも、比較的強くないと話にはならない、猛者が揃う場所ばかり。奥まで行くのは諦めるから、せめて雰囲気だけでも味わいたい。

「じゃあ、レッツゴーしよっ さあ、お姉ちゃんも!」

「サラッ! もう、あんたは何時からこんなに積極的になったんだか・・・」

「あっ、ありがとう!」

サラちゃんに抱き込まれ、トーマスのおじいちゃんにその事を告げると、三人はトーマス家を出る。

傷薬と技の香薬を補充して、道具屋を出るとトーマスの後姿を見つけた。何処へ行くのかとこっそり後について行き、階段を下ると新市街とは別の、古びた街並みに出て来た。

「新市街とは全然違うね・・・もしかして格差があるの?」

「本当だね。同じピドナなのに・・・」

汚れの目立つ石の壁、一部の地面を泥水が占め、覇気の無い人達が行き交う。

着ている服はお世辞にも身綺麗とは言えなくて、思わず自分達を省みる。三人で驚きつつ、トーマスを尾行しているとボロボロの家に着いた。古びた扉を押し開けると・・・

「お、おコンニチハ」

「誰だ!」

「りっ、リオ!? エレンにサラまで・・・あっ、俺の仲間なんで

す

「まあ、可愛いお客んだこと。こちらへいらっしやって下さいな」

広い部屋にこじんまりとしたベッドが一つ。美人な女の人がベッドの上の背もたれに体を預け、歓迎してくれた。傍に居る男の人は警戒心を解き、トーマスの仲間だと聞くと表情を和らげてくれた。

「名前はリオでっす！ 何でか猫やってます。得意な事は肩たたきでっす！！」

「私はエレン。得意な事・・・腕相撲かねえ」

「妹のサラです。好きなモノはリオちゃんです！ 三度のメシより大好きです」

「ニヤ・・・！（私モノ扱いされてる！）」

サラちゃんに抱き込まれた状態で、各々（おのおの）自己紹介をする。

三度の飯より・・・多分冗談で言ったと思うけど、本気にも聞こえるのは今までの行いを見て来たからに違いない。サラちゃんが私に頼ずりする所を見て、女の人は笑っていた。

「私はミューズと言います。是非、私の友達になってください」

「俺はシャルル。ミューズ様の助けになってやってくれ」

目に涙を浮かべ、笑っているミューズさん。今は弱弱しいけど、暫くしたら絶対治ると私は確信してる。部屋の中は質素で、床にも穴が開いてるしボロボロだけど、ほのぼのとした空気に和みつつある時、ドアが勢い良く開かれた。

「大変だよ、ミッチが、ミッチが！！」

「ミューズちゃんまあ！！」

男の子と女の子が部屋に慌てて入って来た。シャルルさんが傍に駆け寄って、彼らに視線を合わせ、話を聞き出そうとしている。

「ミッチがどうした？」

「かくれんぼして、もう帰ろうって言ってるのに、全然出てきてくれないの。皆で捜しても見つからないんだよ……」

「うわあーん！」と泣く子供二人に、ミューズさんが慰める。立ち上がるシャルルさんに、縋る目を向けた。

「シャルル、お願い……！」

「分かりました。ミッチを捜してきます」

「わ、私達も行きます」

毛むくじやらの白い手を上げ、シャルルさんに意思を告げる。ここに居るトーマス、エレン姉さま、サラちゃんも勿論ついて行く気は満々だ。五人で家を出ると、目的地の方向へ足早に進みだす。

魔王殿観光改め、ミッチの救出イベントが始まった

ミッチという男の子を捜す為に、シャルルさん、トーマスと合流した三人は魔王殿の入口へと繋がる通路を歩く。少し高い位置にある入口の扉へは、距離のある坂道を足早に駆け上がった。

「シャルルさんは、以前も魔王殿に来た事があるんですか？」

前を走る灰色の髪の彼に、至極当然な質問をさせて貰った。幾ら私がゲーム画面で内部を網羅したと言っても、実物を間近で見れば戸惑う。やっぱり中に詳しい人が居れば、少年ミッチを捜すのも楽だ。

「昔、腕を上げる為にここで訓練した時がある。ただ、そんなに奥まで行かなかったんだが」

「魔王殿は冒険者にとつては格好の良い場所だよ。腕試しに内部に入る者がいる位だからね。しかし、最深部までは誰も辿り着けないんだ」

「な、何でなの？」

シャルルさんが答え、眼鏡紳士トーマスの補足にサラちゃんが不思議がる。エレン姉さまも興味津々と言った顔で、耳を傾けている。眼鏡を押し上げ、魔王殿の事を語ってくれた。

「噂によると、ある一定の場所にある扉の前でどうしても先に進めないそうさ。トレジャーハンターと呼ぶ、宝を探す連中が愚痴っていたと言っ情報、パブのマスターから聞いたんだ」

「ふーん、ややこしいんだね」

実を言うと、今回の私の第二の目的はそれでもある。でも、今の皆のレベルだと、多分一筋縄ではいかないかも・・・しかも、少年ミッチが居る場所って、進む事が出来ない場所よりも手前にいるんだもん。シャルルさんが居る時、出来れば一緒に来て欲しいんだけどな。

「着いたぞ。ここが魔王殿の入口だ」

「キタ　..!」

空を見上げると何故か雲が黄土色・・・って、どっかの居城を思い出した。デンドロデンドロと、効果音がバツチリ聞こえそうさ。

勿論、実際にはあの音楽は聞こえなくて、モチベーションも下がるけど。

「リオちゃん、今度も先に一人で行っちゃ駄目だよ」

「そうだな。リオは、暴走する特徴がある」

「手を握っとかないとね。ね、リオ？」

「う、うん！」

シャルルさんを除いた三人から、お説教されつつ魔王殿のデカイ扉を開けて中に入る。とりあえず、サラちゃんの後ろを歩く事にし、一同は内部に入り込んだ。

011 ピドナと魔王殿（後書き）

> 懺悔 <

忙しくて、本編の“白呪記”の話を作る余裕がありません。

時間が無いから話を練れないし、構想もすっかりとした物が出来ないの

更新をストップするかもしれません。

“ロマンシング獣記”は良いのかと言えばそうでもないですけど、
こっちは

ギャグっぽく進めていけると思うんで、頑張れる・・・かもしれない。
い。

012 ミツチ救出イベント(1)

扉を押し開けると、そこには湿っぽい匂いが立ち込めていた。

ステンドグラス風の色をした窓からは少しの陽光が入り、床や通路を少しだけ照らしている。わりと視界がはっきりするので心底安心した。

「シャルル、この広い建物の中をどうやって探すんだ？」

「うむ、少しずつ奥へ進んでミツチを捜すしかないだろう」

「あつ、ねえ、先にこっちの道を進んでみようよ」

「リオちゃん、先に行っちゃダメだよ」

剣を持ったトーマスと体力の高いシャルルさんを前衛に、一同は右側の奥にある暗い部屋へと入る。

後衛は猫の私、エレン姉さま、姉さまの妹サラちゃんですっかりと組み込まれていた。突き進むと、一つの小さな部屋を見つける。

「・・・何だこの部屋は？」

「真ん中の床に小さい魔方陣があるね」

部屋の中に一同入る。

エレン姉さまが近づいた時、魔方陣の中の空間がいびつに歪んだ。

オオオオオ・・・

「な・・・なんだ？」

「！ エレン、下がれ、早く！」

「え？ うん」

シャルルさんの焦った様な掛け声に、一同緊張が走る。

エレン姉さまが後ろへ下がりが距離を取ると、魔方陣の中から人が現れた。両手を床につき、座り込んで身動きが取れないらしい。

「わっ、裸の女の人がいるよ。何か様子がおかしくない？ 早く助けてあげなきゃ」

「ばっかつ、サラ、あいつの下半身をよく見る」
「え？」

サラちゃんが女の人に近づく前に、トーマスが素早く止めに入る。人間にはあるはずがない蛇の胴体がくっついていていた。

瞳は縦筋となり、舌がチロチロと出て、今にも襲いかかりそうな形相に様変わる。

「ギャオオオオツッ！」

「ひっ、な、な、なにあれ・・・怖い」

「妖精系に属する蛇、“エキドナ”だ。あいつに捕まるとまず生きては帰れない。」

こちらに近づいて来れないのは、あの魔方陣を守護しているか、はたまた封じられてるかのどちらかだろう」

「むやみに近づけないな。仕方ない、別のルートを探るか」

「行くよ、リオ！」

エレン姉さまに「うん！」と返事をしてこの部屋を出る。

シャルルとトーマスに促され、私達はまた一からのスタートになった。

獣人や骸骨系の比較的弱いモンスターと戦いつつ、長い長い階段を皆で下る。

細い通路に差し掛かった時、一匹の強面の鬼こやまとが徘徊していた。

山羊に似た形の角に、耳まで裂けた大きな口、筋肉が盛りあがった体、背中には悪魔のはねが付き、二足歩行でのしと歩いている。

「ここまで来て羅刹とは・・・」

「この五人で勝てるかどうかだな」

「ニヤ、私も頑張るよ!」

奮起して戦う意思を表示。

シャルは苦笑いし、トーマスは頭を撫でてくれた。

「よし分かった、この中で一番素早いのはリオだ。お前の脳天割り、期待してるぞ」

「任せてちょうだい!」

みんなの歌プリーズ!! と叫びながら羅刹に突っ込む。何の事やらさっぱりらしい面々は反応してくれなかったが、即戦闘に入りこめるように各々配置していた。

「脳天わ つ?」

高い身体能力を生かし跳躍すると、羅刹の頭めがけて棍棒を振り下ろす。

「ポコンッ!」とおかしな音がしたが、豪腕な腕で防御されてしまった。羅刹が攻撃へと転じる前に、後ろへ素早く跳び下がる。

皆の期待を無碍になんてしたくないので、何か良いアイデアは無いかとちっばけな脳みそを回転させた。

「リオツ！ くそっ、これでどうだ！」

剣技・十文字斬りを叩き込むトーマス。

羅刹はトーマスの攻撃に怯みはしたが、トーマスの剣を持つ反対側の手を掴み、ここぞとばかりに大口開けて火炎を浴びせてきた。辺りは熱気が籠り、熱さがこちらまで伝わる。

ゴオオオオツ

「グアアアアツ！」

「いやあああ、トーマス！」

「トーマス！ このっ、トーマスを離せ・・・！」

いきり立ったエレン姉さまの右足に稲妻がほと走る。

モンスターとの戦いで先程習得したばかりの稲妻キックを、羅刹の頭に強く叩き込んだ。

ふらふらとよろめいてる間に、上半身に大火傷を負ったトーマスを羅刹から引き剥がすと、シャルルの近くまで移動する。

「炎を塞ぎ、我らを援護せよ、ファイアウォール！！」

朱鳥術を発動させたシャルルが炎の壁を作る。

炎の攻撃を和らげる効果を持つ壁が、一時だけ火炎攻撃から身を守ってくれた。その間に、サラちゃんも傷薬でトーマスの傷を回復するが全回復とは至らない。急がなければ！

「ニャオー・・・閃いた！」

ピコンと頭の上で電気が光り、またまた羅刹に突っ込んでみる。高く跳躍し、ある技を繰り出した。

「リオ専用・かめごーら割り！！！！」

防御した腕に接触した瞬間、羅刹の体に異変があった。

膜のシールドが体全体を覆い、ピリピリと音が鳴って力を奪う。奴の防御力を大幅に下げる事に成功したようだ。

私が容易に扱えたのは、身体能力だけしか下げられない未完成の技だ。大技なのに致命傷を与える事は出来なかった。

「サラちゃん、お願い！」

「分かった！ 混倒滅殺・イドブレイク！」

膝を床に付けて立ち上がった所を見逃さず、一瞬動きの鈍くなった羅刹の腕に弓矢を打ち放つ。混乱しているのか、こちら側に攻撃してこなくなった。

「リオ、行くぞ！」

「うん！」

シャルルに相槌をうち、羅刹との間合いを一定の距離で取る。

彼は槍を持ち、私は棍棒を両手に持って二人一緒に時間差攻撃を繰り出した。陣形技の一つ、エックス攻撃だ！

「グオオオオオオツツ！」

「やったね、シャルル、リオちゃん！」

「ああ」

「ニヤ！」

雄叫びを上げて地に倒れた羅刹を見て、一同はやっとひと心地つく。
トーマスの上半身火傷が酷かったので、ポドールの洞窟で手に入れた生命の杖で回復した。
杖を持ち、治れと念を込めると、緑色の淡い光がトーマスを優しく包み込む。

「・・・ん？ あ・・・リオ？」

「トーマス、大丈夫？」

「・・・もう死ぬかと思ったよ」

トーマスが体を起き上がらせると、サラちゃんとエレン姉さまは泣きながら喜んでいた。

シャルさんがトーマスを立たせて、先の事を話します。少年ミツチの居る場所へ辿り着かねば、魔王殿を出るわけにはいかないと言った。泣き顔で言いました。

「オレはもう大丈夫だ。リオの回復技のお陰で体に支障はない」

「悪いな、ミツチ救出が優先なんだ」

「私達もそのつもりで来たんだから、謝らないですよ」

「そっだよ、もうちょっと先へ進まなきゃ！」

エレン姉さまが諭し、サラちゃんも元気よく言っただけで男性二人の背中を押した。ミツチ救出まで後少し

012 ミッチ救出イベント(1) (後書き)

久しぶりなので書き方を忘れてしまった・・・しかも出てくる人数が5人も居ると、書くのが大変だという(爆) それでも読んでもらえると思います。

とりあえずミッチ救出イベントは次の話で終わる予定。サクサク進むと思います。

013 ミッチ救出イベント(2)

「エキドナや羅刹を見た後だから、もう驚かないとタカを括っ
たんだが・・・駄目だな、ここでは常識もクソもないらしい」

羅刹を倒した後、一同は更に奥へと進む。すると広い広間に出た。
階段から見下ろすと、そこには魔物がうようよと蠢いていた。妖
精や悪魔系の魔物がわんさかいる。

「ニヤ、きつとここには陽の光が容易には届かないから、絶好の場
所なのかもね。地下へ進むほど魔物が多いや」

「太陽が届かない割には、建物の中はよく見えるんだけど」

「何かの力でも働いてるのかもしれないな」

「ごもつともなサラちゃんの見解に一同は不思議がるが、まずはミ
ッチを救出しようと思いを張り巡らせた。魔物が蠢くこの広間で、
どうやって魔物に捕まらずに移動したらいいのか考えないと、進む
事が出来そうにない。」

「わ、私が囿になるよ」

「リオ？」

「え、やだ、何でリオちゃんが囿り役になるの？ ヤダよー」

「そうだよリオ。あんたはあたし達と一緒に行動しなきゃ」

駄々をこねるサラちゃんとエレン姉さまの手にペロリと一舐めし
て、シャルとトーマスに向き直る。

「私が一番素早いんだよね？ それに私猫だから、魔物には興味が

向けられないかもしれないじゃない」

「そうだが・・・」

「やってみる！」

棍棒を背中中の風呂敷に縛り付け、たかたか二足歩行で走ると小柄な妖精に見つかってしまった。私の姿を視界に納めると、ニヤリと不気味に笑い、背中中の羽をはばたかせながら襲いかかってきた。

「ね、猫でも駄目だった〜」

さらに急いで逃げ回る。この魔物は動きが鈍いので捕まる事は無かった。

この部屋の柱の陰に魔物が潜んでいる事は、ゲーム画面越しでプレイした者なら誰でも分かる。

予測して並居る魔物を寄せ付けず、さらに調子に乗って一匹で大広間の中央を駆け抜けてしまった。

「・・・一匹でここまで来ちゃったよ」

さらに奥の部屋にある広間に出た。

この部屋はさすがに一匹では無謀と思うのだが、どうしてもある行為を今、しておかねばならない。

アビスゲートはさらに地下深くにあるし、またこの行為をする為だけに戻るのはいかかしく思ったので突っ走ってしまった。

「なんかないかな・・・」

ここは骸骨だらけのお部屋だったはず。うんうん唸ってても始ま

らないので忍び足で行く事に。するとまた柱の陰に隠れていた骸骨がわんさか出て来た。

「ニヤオツ、猫は、猫は食べても・・・美味しくなんかいないんだから」

「ゼエハア言つて逃げ回つてると、扉の前まで来れたようだ。毛むくじゃらの手をそつと当てて押してみる。」

『指輪を・・・』

「よっしゃ、声聴いたらもう終わりだもんね」

素早く後ろを向くと骸骨達が間近に迫ってきていた。

絶対絶命の言葉が脳裏に浮かび上がった瞬間、槍技の石突きが繰り出されていた。

「シャルルさん??」

「すごいなり才は。君一人でここまで来れるなんて」

「ミッチ少年はどうしたの?」

「無事に見つかったよ。と・・・話は後だ、ここから脱出する!」

シャルルさんの背中におぶせてもらつて、この広間から脱出した。朱鳥術、槍術に長けたシャルルさんにかかれば、その辺の弱い魔物では太刀打ち出来ないらしい。

サラちゃん達と合流した私達は、来た道に戻つて魔王殿の外にまで無事に出れた。

「ミッチが見つかったのは君たちのおかげだ。本当に感謝する」

「ニヤ、良かったですね!」

「ホント、リオちゃんも帰って来た事だし、よかったよぉ〜」

「リオは毎回突っ走るんだから」

「ミッチ、もう魔王殿の中まで入るなよ」

「うえーん、ゴメンナサーイ！」

モヒカン頭のミッチを連れて、シャルルさんは旧市街のミューズさんの居る家へと帰って行った。

サラちゃんに抱き寄せられながら頼ずりされ、私達もピドナの新市街にあるトーマスの家へと向かう。

「今日はゆっくり食べて寝てくれ。それから、寝る前に耳に入れておいて欲しいんだが」

「ニヤ？ どうしたのトーマス」

トーマスの家で御馳走を頂いた。

クリームスープとホクホクの白いパン、果肉とソースを組み合わせたステーキ肉。大豆と魚の盛り合わせなどの栄養満点な食べ物だった。

皆でペロリとお皿を空にして、お風呂にしっかりと浸かせてもらったのだ。

そして今、エレン姉さまとサラちゃん、猫の私とトーマスは客間に居る。

「また後日ミューズ様の家へ行く事になったんだが、エレンやサラ、リオはどうする？」

「ニヤ、私も行きたい」

「リオちゃんが行くなら私も」

「・・・皆が行くなら私もだね。暇だしいいよ」

ミュージズ様が喜ぶと言って、顔を綻ばせてトーマスは部屋を出て行った。

次にミュージズさんの家に行く時は、きっちり準備しておかないと！

013 ミツチ救出イベント(2) (後書き)

本当にサクサク進みました。

次はミューズ様が出る夢魔編の予定です。

「はあっ、はあっ……」

「おお、ミューズ、ミューズ、私の愛しい娘……どこに行くのだ」

「もう止めて、何で、ここにいろの？」

「愛しい娘、さあ、よく顔を見せておくれ」

「や、止めて、お父様、苦しい……」

「……さま、ミューズ様！ 大丈夫ですか？」

「はっ、はっ、シャルル……？」

早朝。

窓から差し込む柔らかな光が室内を照らす。

目を覚ますと、よく見知った自分の従者が心配そうに顔を覗き込んでいた。

流れた汗により顔がべとつく。銀色の髪を優しく整えられ、あたたかな湿ったタオルでそっと拭われた。

「何か気に障る夢でも見たのですか？ さぞ怖かったですよね、もう大丈夫ですよ」

「……シャルル、さっき見た夢は本当に怖かったの。でも、現実には起こらない事なのよ？ お父様はもうこの世には居ないし、何より私の首を絞めるなんて事は絶対にしない人だったもの！」

「承知致しております。かつてのミューズ様のお父上様なら、例えるなら貴方を目の中に入れても痛くないような可愛がりよもの……」

「シャルル、それを親バカと言うのではなくて？」

「世間ではそうも言いますね。さあ、顔を洗って来て下さい。髪を梳かしましょう」

「・・・シャルルったら！」

体を従者に寄せて、震えが止まるまで抱きしめてもらっていた。深呼吸をし、やっと呼吸が安定するとベッドから降りる。

質素な軽めの靴を履き、一室を出て井戸のある場所へと出る。

あらかじめ溜めてあった石造りの水槽から一定量の水を樽から掬い上げると、それを両手で掬って顔を洗った。

旧市街にある水道事情は、新市街よりも設備が整っていない。

しかしシャルルや旧市街に住む住民の手によって、かつてのお嬢様であったミューズに住みにくさなど感じさせる事なく過ごせる様にはなっていた。

「・・・あれは幻なのよ、お父様は、もう居ないんだから」

顔を洗い、瞼を閉じる。

すると浮かび上がるのは父の姿。

自分の首を絞め、殺そうとした悪意ある幻影。まぼろし そう自分に言い聞かせて、シャルルの元へと戻った。

「シャルル、お待たせしました」

「どうぞこちらへ。さあ、髪を梳きましょう」

大きな鏡がある鏡台の前の椅子に座り、柔らかなブラシで梳かれる。

腰まである長い銀髪は、毎日手入れをされているので艶やかで滑らかな状態を保っていた。

「フンフンッ」

「おや、先程の時とは一転して、やけに嬉しそうですね。リオが来るからですか？」

「うふふっ、そうなの、サラちゃんやエレンさん、リオちゃんが来るのが楽しみなのよ」

「リオ・・・人間の言葉を喋れる猫のリオですね。彼女が来てくれると、暗い部屋が一気に明るくなる」

「あんなに可愛い猫ちゃんを抱っこするのは久しぶりなのよ。今まで動物なんて触らせてくれなかったから・・・っと、リオちゃんを動物なんて言っちゃダメよね？」

「それは・・・彼女、リオは人間くさい猫ですからね。もしかしたら憤るかもしれません」

二人して純白の猫を思い出す。

部屋の中で胡坐をかいて欠伸をし、難なく繰り出す二足歩行は、猫に人間を足したような寛ぎ様だった。

「ニヤオー、ご機嫌麗しくておこんにちは、ミューズさんにシャルさん！」

「こんにちは〜！」

「こんにちは、お邪魔するよ」

「いらっしやい、どうぞ入って。ね、シャル」

「ああ、よく来てくれた。好きな所で寛いでくれ。ん・・・リオ、トーマスは？」

「今日は用事があるって！ だから3人で来ちゃったんだよ」

姉のエレンに妹のサラ、サラに抱き寄せられた純白の猫リオ。女の子三人がミューズ邸を訪れていた。

近所に住む少年ミッチを魔王殿から共に救出した一件以降、一時

であるがパーティに加わり戦闘するなどしてから親しくなった。

「ニャ、これはもしか猫じゃらし!」

「うふふ、サラちゃんから聞いて、シャルルに用意してもらったの。いい、良いかしら、リオちゃん・・・」

「ふぬぬ、良いも悪いも、これを見た後で猫の本能が止まらニャ・・・ぬがあっ!」

決して広くはない煌びやかでもないが、それでも室内の空気は穏やかで温かみに満ちていた。

主でもあるミューズは、普段の病床にも負けない気概で、一心不乱に猫じゃらしを振り続ける。旧市街に来てからの、今まで一番楽しそうな表情を見せていた。

この穏やかな時が一生続き、主の体が健康であれと、シャルルは願わずにはいられなかった。

「ふー、ふー、ミューズさん、なかなかやりますニャ・・・」

「はあ、はあ、リオちゃんこそ、可愛い顔して俊敏な動きをするわね・・・」

「ミューズ様、リオちゃんは私達と一緒に冒険してきたんです。だから普通の猫よりもっと素早く動けるんですよ?」

妹のサラが身を乗り出し、リオの顎をゴロゴロと擦り出す。

白い猫は気持ち良さげに身を委ねていた。

「まあ、そうなの?」

「私達よりも早く動くよ。ねえ、リオ?」

「エレン姉さまに褒められると、照れますニャ」

サラの姉・エレンに褒められ猫の体をもじもじ、右手で頭をかい

て照れ隠しをする白い猫リオ。人間くさい彼女こそがトーマスら含めたパーティーの要だと、シャルルは瞬時に悟った。

「リオちゃんの良いなあ、私も一緒に冒険してみたい」

ミュージズはうつとりした表情で外への想いを馳せる。

リオを見ると木漏れ日の中から覗く太陽を思い出す。きっと激しく運動しても体に支障はないと思えるくらいに。

「ニヤ、ミュージズさんもいつか外へ行けるようになるよ！」

「もしそうだったら連れて行ってくれる？」

「そうだね、シャルルさんの許可を得てからかなあ」

「シャルル・・・」

「はい、そこまです。ミュージズ様はまだ外へはお連れ出来ません」

ミュージズのおねだり眼力を跳ね除けた従者のシャルルは、薬の間だと言ってミュージズに薬湯を用意した。無臭なのか、緑色でドロリとしている。

「シャルル、今日のところは引き下がるわ。でもいつかは・・・ね？」

「ミュージズ様、分かって下さい。お願いします」

普段はあまり感情を露わにしないシャルルの困り様に、リオを含めた三人は一樣に目を丸くした。結局のところ、シャルルはミュージズに弱いのだと決定付ける事にしたのである。

「ニヤオツ、それでね、ガウラツていうカイナがお馬鹿でどうしょ

うもないKY（空気読めない）なんだよ」

「プククっ、リオちゃんの話って面白い！でも動物って、普通は空気を読むものなのかしら？」

「はて、読むのではないのでしょうか」

小首をこてりと傾けて疑問していると、リオの後ろからサラが力強く抱きしめて頬ずりしていた。サラ曰く、今の動作は究極の萌えに入るらしい。

「リオ、野生の勘の事を言っているのか？それとも場の空気を読めない、そっちの意味で言いたかったのか」

「そうそれ、場の空気が読めないオスの獣だったの！」

「リオちゃんは、そのガウラが大好きなのね」

「ニヤ？」

楽しいお喋りの時間は過ぎ、時は夕刻を迎える。

緋色の温かな光が窓から暗い部屋を照らしている。

そろそろミューズ邸からお暇しようかと、女三人は身支度していた。

「楽しかったよ、ミューズさん！また明日来ても良いですか」

リオを抱き締めてまた来てほしいと、三人に言う。

こんなに大勢のお客は本当に久しぶりだった。

さよならと手を振り返すリオ達と、入れ替わりに入って来たのはミッチの遊び仲間の少年だった。

少年を中に招き入れ、いつもの楽しい夜は過ぎる。しかしそれは、安寧とは間逆の始まりを告げる序章に過ぎなかった。

014 深窓の君 夢魔編 零 (後書き)

久しぶりの投稿です。

今回の夢魔編では、どの視点で書けばいいのか悩みまくりですね。

いつもは猫のリオ視点でギャグ話を…なんですが、リオ視点だとシリアスが書けないし…というわけで読み辛かったらゴメンナサイ>

<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944h/>

ロマンシング獣記

2011年2月9日23時08分発行